661
214

0000889000

0000889-000

661-214

ソヴエト・ロシヤ今日の生活

勝野金政・著

千倉書房

昭和10

AAB

661
214

ソヴエト・ロシヤ今日の生活

勝野金政著

叢書房版

66|-214

序

私は序においては、あまり多くを言ふことを好みませんが、只一言云つておきます。

丁度私のソヴエト・ロシアにあつた最近六ヶ年は、ソヴエト・ロシアの社會生活史において重大な意義をもつた時代でありました。單に國内的に觀ても第一次、第二次五ヶ年計畫の實施にともなふ社會生活の混雜と、不安と相剋は、ソヴエト政權樹立以後において初めて觀るような危機にまで到達しました。

この時代における社會生活と個人生活との相互關係を主題とし、今日の蘇聯邦國家の大衆の現實の生活の姿を出來るだけ浮き上らせて示さうとして描寫したのが

序

この『生活記』の内容であります。

一九三五年三月

著者

ソヴエト・ロシヤ今日の生活

目次

第一章　清黨……一
一、共産大學の細胞……一
二、清黨される人々……四
三、寄宿舍の悲劇……二三
四、赤軍司令官の家……二九
(1) アリーヤ……二九
(2) アリーヤの叔母さん……三五

第二章　雪の赤色地帶……四一
一、伯林出發……四一
二、モスコー（その一）……五三
雪のクレムリン……五三
三、モスコー（その二）……六一
（1）白い家……六一
（2）赤い家……六三
四、モスコー（その三）……六六
（1）クララ・ツエトキン……六六
（2）ベラ・クン……七〇
（3）クイシネン……七三
（4）ラデク……七六
（5）五月一日……七七

第三章　ボルシエビキーの家……八三
其の頃の彼等……八三
（1）老闘士……八三
（2）新來者……九一
（3）別れ……九九
（4）秋の夜……一〇九
（5）隣の娘……一一四
（6）街頭……一二一
（7）客舍の友……一二八
（8）黨の會合……一三三
第四章　インテリゲンチヤの末路……一五三
一、十年後の邂逅……一五三

(1) コンスタンチン教授の死……一五九
(2) 教授間の軋轢……一六三
(3) 火葬場……一六七
(4) 二人の女優……一六九
二、ウダルニク（突擊隊）……一七八
第五章　カチウーシヤの家……一八七
郊外……一八七
(1) ナターシヤ……一九七
(2) 饗應……二〇一
第六章　黑海の岸にて……二〇五
一、黑海への旅……二〇五
二、温泉場……二一五
三、プロレタリア式の娘……二二三
四、熊との邂逅……二二三
第七章　ツーラの郊外……二二七
一、十字路……二二七
二、白海の岸……二四三
三、愛人……二四八
四、昔の手紙……二五三
五、新生への道……二五八
第八章　動く東方戰線……二六七
一、モスコーを去りながら……二六七
二、ウラールの旅……二七四

三、工場都市・スベルドルフ……二八二
四、ツァー最後の家……二八九
五、白金工場の煙突……二九三
六、山中の製鐵工場……二九八
第九章　シベリヤにて……三〇五
一、西部シベリヤ……三〇五
（1）共同生活……三〇五
（2）生の空隙……三〇八
（3）彼等の戀愛觀……三一二
（4）ニウーシヤの占ひ……三一六
（5）シベリヤ曠原の月……三一〇

二、バイカル湖附近……三二六
（1）レストラント……三二六
（2）曉のバイカル湖……三三一
三、國境附近……三三三

第一章　清　黨

一、共産大學の細胞

五ケ年計畫の第二年目、コルホーズ案が具體化され、激しい運動が起りかけた頃であつた。

黨の中央部は幾年振りかで清黨運動のプログラムを發表した。

モスコー市パウマン區委員會に所屬するこの學校の黨細胞でも、清黨運動の準備をし初めた。

表の校門には極めて人の目を引くやうに、

――市民諸君！×月×日黨細胞の清黨を行ふ、黨員の生活について知れる材料を投書して下さい――

と、貼紙が出てゐる。

學校の內部、大きな廊下の壁に掲げられてある壁新聞には――清黨の日を前にして――と云

ふ題で種々の漫畫が張り出されてゐる。泣き顏をしてゐる黨員、心配のためにやつれ細つた女黨員等々、黨員の學生達は他人のことのやうでまた自分の心裡にも似たやうなこの漫畫を、苦笑しながら眺めてゐる。

何處から聞いて來たのだらう……舊い黨員などの誠らしく言ふところに依れば――現在黨員は二百二十萬程ある、そのうち約二十萬人即ち約十パーセントが黨から除名される方針である――と、さうすればこの大學では三十名程も除名處分を受ける者が出來るだらう。

屋根も街も、そして廣場も雪にうずもれた二月の初めのある日である。今日はこの學校で最初の清黨が行はれる。廊下や控室では學生達の立話がどれもこれも同じようにその日に清黨される十人程の學生達の身の上を噂してゐる。

檜山は授業が濟んでから階下の大會議室へ降りて行つた、すでに滿員である。全然顏を知つてゐない學校關係以外の市民も澤山來てゐる。非黨員の教師達殊に語學を教へてゐる女教師などは他人の事であるので芝居でも見る位の好奇心で氣輕な態度でゐるのに反し、日頃威張つてゐた黨員たちは何に衝突するのか判らない不安があるので、それとなく動搖したり昂奮してゐる。

「僕は少しも怖くない！」

元赤軍の將校であつたキイビンは特殊の勳功を立てた、と云ふ理由で二つもの『赤旗章』を胸に吊してゐる。彼は黨の生活など少しも知らない食堂の若いマダムを相手にその夜の清黨についての噂をしてゐる。

食堂の若いマダムは機械技師の細君であるが、「勞働奉仕」として喰べるだけで學校の食堂の方で働いてゐる。彼女は黑髮の小背な美人であるのみならず、帝政時代の女學校の四年を卒へてゐるので讀み書きは自由で外國語などは學生より上手に話すインテリである。

「あたし、大劇場へゴーゲルのレヴゾールを見に行く約束なんだつたけれども清黨のためにおちあんになつてしまつたわ。當分かうして夜晝働くのよ、今日は一體誰れが清黨されるの？」

彼女は次から次へと現れて、茶やサンドウイチなどを注文する學生のために手を動かしながら、それ以上に輕い口を動かしてゐる。

「會合が初まるよ、皆行つた、行つた！」

これも茶でも飲みに來たらしい細胞委員の一人が、疲れた顔を葉卷の煙でいぶらせながら皆の入場を促した。

檜山は人ごみの中から自分のグループのゐる處を見出して彼等の間に席を占めた。

鉄臺の中央には大きなテーブルが据えられ赤い布が掛けられてゐる。黨中央部から區委員會から出席した清黨委員が二名、その左右には工場から出席した勞働者の黨員男女二名、その周圍は黨細胞の委員である學生連で、學長や教務課長などは後の方に控へてゐる。

黨細胞書記の短かい言葉が終ると日程通り清黨に入つた。

二、清黨される人々

第一に壇上に立つた者はチェンチコフ日本科の三年生である。彼はその黨員章を懷から出して委員の一人に渡した。

「私はチェンチコフ・セルゲイ・ニコライビイチ。一九〇〇年ウクライナの東部――洲の――の町に生れました、父は何々と呼び百姓で四ヘクターの土地と二頭の牛を持つた貧農ですでに死亡、母も農女、すでに死亡、私はユダヤ人でしたから六歳の時に町の小學校へ行きました。ロシア語を學ぶためです。家計を助けるため十二歳の時から煉瓦工場の徒弟となり、一日二十カピイツクで勞働しました。ツアーの軍隊とは何の關係もありません。一九一七年には工場内のストライキに參加し、越へて一八年にはバルチザンに編入され、一九年には正式に赤軍第五軍團に組織され、野砲兵砲手から終いには大隊長にまで進級しました。……第一回の清黨は赤軍内において受け無事通過して來ました。一九二三年除隊となりモスコーに上り、勞働中學プハリンに入學、同校卒業後この大學へ入學しました。私には妻があります、妻は同じ町のある商家の孤兒であり、現在は非黨員夜學の工手學校へ行つてゐます」

自分の經歷を大體語つたチェンチコフは大息してからコップの水を飲み、さらに前へ進んで行く。

「昨年の五月漁業組合からカムチヤツカへ派遣され去る十月モスコーへ歸りました……」

第一に清黨と言ふ俎上に上つたチェンチコフの言葉が一段落をつげると聽衆のうちから待ち構へてゐたやうに質問が向けられた。

『最初に黨へは如何なる資格で入いつたか？』『所屬してゐた野砲兵の聯隊長の名は何と言ふか？』また『何故除隊されたか？』

それ等の質問はまだ〳〵よかつた、黨細胞の委員達は彼等の手許にある投書を讀みながら、

「カムチヤツカからの歸途ウラジオストツクで幾日か滯在しただらう。その第一夜同志達と離れて何處へ行つてゐた。そして何處で泊つたか？」

と、質問を發した。

壇上の彼は動搖しやうとしてゐる自分を極めて注意深く制止してゐる。わざとらしく落ちついて葉卷をふかしてゐたが、

「ウラジオストツクは私に最初の地であり不明の街であつた。私はあるカフエに座つてゐるうちに同志達にはぐれてしまつたので仕方なしにその近くにあつたホテルへ行つて泊りました」

「泊つた事は判つてゐる。われ等の知りたることはその時君は誰れと一緒に行つたか正直に云つて呉れ給へ」

黨の中央部から來てゐる委員はその職責がらか冷めたく鋭く問ひつめた。

「私はそこに居合した一婦人にホテルのアドレスを聞いて少しの間道を一緒に歩きました」

「それだけですか？」

「それだけです」

「トラシモフ同志！　あなたの報告によると、『身元の不明な若い婦人と一緒にホテルへ行つて泊つたことをチンチコフ自身が翌日になつてオニシモフ同志に話した』とありますが、あれは事實ですか？」

參會者の席からトラシモフは立つて、

「事實です」と、答へた。

委員は改めて參會者大衆の方を眺め、

「こゝへオニシモフ同志は來てゐますか？」

とたづねた。

「ハイ、居ます、私です」

大柄なオニシモフは立つた。彼は委員に指し招かれるまゝに演壇の側にあがり、極めて不得

要領に、

「私はチェンチコフ同志の私事についてトラシモフに話したのは、全く個人として秘密に葬り去る出來事として話したまでゞ、それを公開の席へ發表されては大變迷惑します」

と身體の大きい彼は板ばさみになつた苦痛をこぼして皆のものに笑はれた。

オニシモフは餘計な口をきいた計りに、飛んでもない苦境にチェンチコフを陷入れてしまつたと後悔して泣き想な顏をして壇から下りて來た。

彼と入れ替つて密告者のトラシモフが登壇した。彼はまだ若い黨員であるが純勞働者出身であるため自分の立場には自信を持つてゐる、從つて政治的に大膽である。

「只今オニシモフ同志は私に個人的に秘密に話したと言ひましたが、およそ共產黨員である者が公私を區別し秘密を條件とした生活が出來るものですか？　私はさう言ふ態度は正しくないと考へる。私はチェンチコフ同志の問題を暴露した。けれどもそれと同時に私の私行上において批判されなくてはならない問題は、私の清黨される時に遠慮なく云つて貰らふと考へてゐます」

「トラシモフの意見は正しい！」

清黨の委員達は皆さう云つて若いトラシモフを賞めた。それと反對に、俎上にあるチェンチコフに對する追求は一層激しくなつた。

「チェンチコフ同志！　あなたが事實を承認しようと、しまいと問題は明白である。で私は清黨委員とし參會の諸君にたづねる——ウラジオストックは御存じのやうに港であつて外國のスパイなどのゐるところです。そこで共產黨員が淫賣婦などと一緒に散步したり同宿したりする事は最も危險な行動です——同志諸君はどう考へますか？」

委員の言葉の終るか終らないうちに、學生の黨員が自席から、

「諸君！　私はチェンチコフ同志の私生活を少し知つてゐます。彼が今回カムチヤツカへ行つてから取つた行動は誠に不眞面目なもので、彼は一ケ月に六百ルーブル近くの給料を貰ひながら、モスコーに殘してある妻と子に一文も送金しなかつたさうである。それにもかゝはらず彼は港で女を買ふて遊んでゐる、かう言ふ無責任の男は黨員としてのみならず、ソヴエートの市民としても排斥すべき分子であります。故に私は彼を黨から除名することを提議します」

「さうだ！　さうだ！」

と、叫ぶ者もある。

「それは可愛さうだ！」

と、叫ぶ者もある。演壇の委員達は額を集めて何が協議してゐる。しばらくすると黨細胞の書記は正面を向き直つて、

「チェンチコフ同志の行爲は黨の規律を犯してゐる、で私は黨から除名しやうと思ふ！」

と、除名處分を要求した。

「同志諸君！　私に少し言はして下さい」

と、當のチェンチコフは異常に緊張した表情で委員一同に發言を要求し、

「私は今神經が昂奮してしまつて何を言つてい〻か？　それさへ判明出來ません！　ウラジオストックにて私の取つた行動は確に惡るかつた。しかし、あれを摘發した同志達は皆一つのグループで私は只一人であつた。そのためあんな結果を將來したでしよう！　次に私の妻子に對する送金ですが、私は出發する時多額の金を與へてあり、カムチヤツカからも電報で送つてあります。しかし私の妻はヒステリーで私のあることないことを至るところへふれ廻つて歩いて私の蹉跌を希望してゐるやうな女です。諸君はそんな些細なしかも不正確な論據をもつて私を黨から除名するなんて事は出來ません！　私は國内戰の酣なる頃自から野砲兵隊を組織してソヴエート政權の支持のために奮戰してゐます。この左の腕にはデニキン軍から狙擊された彈丸の跡が殘つてゐる。偶然に犯した僅かの誤謬を取りあげて赤軍の勇士その組織者を黨から追ひ出すと言ふ事は黨を愛する、黨員を愛する者のやるべき政策ではありません！」

チェンチコフは死力を盡して自から除名說に反對した。彼の涙を流しながらの抗辯が奏功したのか、除名は留保され、警告と云ふ微罪の記號が彼の黨章に記入された。惡戰苦鬪してやうやく命だけを取り止めた、と言ふ狀態のチェンチコフは壇を下ると身體の具合が惡いと言つて家へ歸つて行つてしまつた。

第二番に呼び出されたものは二つの『赤旗章』を持つてゐるキイピンである。

彼は政治的にアクチーブでない。その母が商人であつた。彼は身元の不詳の幾人もの女と關係してゐる、と言ふ理由で黨から除名されてしまつた。

第三番目は、支那科の四年生で奉天の領事館に二年も實習に行つてゐて歸つて來たばかりである。

彼は階級と言ひ、黨生活と言ひあまり危險な分子ではなかつた。で、すでに降壇しやうとする刹那に一人の女黨員が立つた。

「あたしは、何と言ひましよう？　かつて彼の妻であつた、と言ふ立場からシマコフ同志の生活に對して清黨の席上において一言致したう御座います」

と、彼女は黨員であつても女であるので少し顏を染めた。一群の學生達は『クス』『クス』と、苦笑してゐる。多分彼等の昔の因果話しでも知つてゐるのだらう。

「あたしと彼とは同じ支那科の同期生で法律上正式の結婚をして奉天へ行きました、ところが彼は彼地においてあるロシア婦人と知り合ひになり、あたしを捨てゝ彼女と結婚して歸りました。あたしは嫉妬ではありませんが不當な虐待を受けた女としてシマコフ同志を訴へます、それから彼の實父は教父さんでありました」

彼女の意外の訴へに笑ふ者もある、嘲つてゐるものもある。委員達は眞面目に彼等二人の當事者の顏を見つめてゐる。

「シマコフ同志！　あなたは今妻を幾人持つてゐます？」

「一人です」

委員とシマコフとの問答の終へないうちに、

「シマコフ！　お前その妻と何處で知り合ひになつたか言つて見ろ、まさかシネマではあるまい」

と、參會者の中から叫んでゐる。

「同志と結婚しておいて他に愛人が出來たと言つて結婚を解消するのは確によくない、しかしこの問題は女黨員、特に婦人委員の意見を聽くことにしましよう」

と黨の中央部から來てゐる委員は赤布で頭を卷いてゐる婦人委員の丸ぽつたい顏を見た。

「常識としてはいやになつたからと云つて妻を替へるのは好しくない事でしよう。しかしこの問題は個人の相對的の問題で黨が干涉するやうな政治問題ではないと思ひますわ、それよりはあたしは彼と實父との關係に興味を持ちますわ」

婦人の委員は問題の中心を階級的な方向へ向け直した。」

「さうだ！　さうだ！」

と、學生達は怒鳴る、事實において近代的な社會生活をしてゐる黨員が結婚解消で莫大の責任を追求されたんでは浮ぶ瀬はない、と思つたからだらう！

シマコフは敎父の實父とは事實的の關係はない、小さい時別れたので顏も知らない、と答へてゐる。それに誰一人それを擊爆すべき材料を持つてゐないので輕く懲戒で通過した。彼の次に登壇したのは彼の前妻であつた女學生である。

「あたしは孤兒で中流ヴォルガの農家に生れました。家が貧乏であつたため女學校の二年までしか行きませんで、後は金持の家で女中奉公をしてゐました。一九一六年大戰半ばの頃あたし達はその地方において猶太亞共產黨を組織し、一九一八年にはバルチザンに投じ同時に黨員になりました。その後中流ヴォルガ地方の工場、新聞の編輯局で働き、最後にはシベリヤのイルクツクに黨の新聞の編輯長をしてゐました。この學校へ入學し支那科から奉天へ派遣され今年やうやく戻つて來ました」

彼女はそこまで無難であつたが、今度は前に彼女から攻擊されたシマコフが質問する、と言つて自席から立つた。皆のものは委員までも苦笑し初めた。

「シマコフ！　仇討ちか！」

などと彌次つて委員から注意を受ける者もある。

「私も彼女については少し知つてゐます！」と、シマコフが冒頭すると「君が彼女について一番よく知つてゐる、遠慮するな！」と、學生達は皮肉を飛ばす。

「彼女の實父は敎父です」

「何だ！　君達の芝居は！」「坊主の同志討か！」

場內は笑ひと皮肉のために喧騷になつてしまつた。委員の一人は坊主めくりのやうなこの清黨の滑稽さに天井を仰いで笑つてゐる。

女學生の泣き出し想な顏を見向きもしないで、シマコフは、

「彼女の父はソヴェトの革命直後アメリカへ亡命し現在向ふで働いてゐます、そして彼女のところへドラを送金して來ました」

と、彼女の經歷の裏の方をあばいて行く。

彼女は敵になつて迫つて來る前の夫を、うらめし想に盜み見てゐるが、その顏は眞青になつてしまつた。

委員は彼女の答辯を要求した。彼女は鉛筆で重心を書き止め、聲に元氣をつけて、

「あたしも、自分の父を全然知りません、彼がアメリカからドラを送金して來たことは事實ですが、あたしは拒絕して返送しました。あたしは知らない父の生活に責任は持てないのみならず、幼少から他人に育てられ十八歲から黨生活を續けてゐます」

彼女の答は充分でない、否定的な方面は一切言はない、と言ふ理由で——猶太亞共產黨は反革命的なものである、とか家族關係を率直に言へ、ずるい——とか質問され皮肉を言はれた。

委員會では彼女を除名するところを許して、最高の懲戒處分と言ふ理由で降壇さした。

その次には若いトラシモフが登壇した。

「私は勞働者、母はグトフのガラス工場の女工、祖母も元女工、今は國家から恩給を貰つて八十の餘生を送つてゐる」

「お前の經歷は聞く必要はない」、「早く降壇せしめよ！」

と、皆の者が叫ぶ。

委員達も彼には聞きたゞす餘地はない。只黨の一般的政策について質問して、無難で通過させた。

次に壇上に立つたのはルーゼル學長である。獨逸、佛蘭西のインテリと比して少しも遜色のない體格風彩である。彼は一九〇三年頃の黨員で一九〇五年の革命後は外國に亡命してゐた。その後は外務人民委員會に働いてゐたが、つい最近まで伯林のプラブタ通信員であつた。

彼は舊いボルシエビキーであるためにその經歷を物語るのに二三時間もかゝつた。黨の歷史の一部を聞くやうである。然しコンミンテルンの清黨の際ビヤトニツキーが二日かゝつた、と云ふのに比較すればまだ〳〵短い方である。

黨員である以上は十年の黨員も一年の黨員も變りない。また中央委員であらうと學長であらうと土方であらうと區別はない、勇敢に無慈悲に質問して差し支へない。

學生の一人はレーニン全集のある一部の中を拔粹して讀み上げ——レーニンはわれ等の學長

を解黨主義者と云つてゐる、故に私は彼を解黨主義者と性質づける――と攻撃の矢を近くから放ち撃つ。

しかし學長のグセフは平然と葉卷を燻かせながら――レーニンがそんな事を言つたのか私は今初めて聞いた――と、呑氣なしかも他愛のない返事をする。

學長のグセフはどちらかと云へば西歐仕込みの紳士である。伯林か巴里で仕立てた樣な立派な洋服を着て矢張派手な外國製のマントーに帽子、プロレタリアートの街モスコーでは極めて目立つ服裝である、そして羨やまれる身の上である。彼は西歐の文化に永らく浸つた人だけに溫い明るい感じを人に與へる、そして野心のない淡白な彼はその手腕も振り廻はさないし、學生にも干渉しないので――好い學長であらう。しかし、赤軍の中から工場の中、あるひはソヴエト、黨の機關から出て來た學生の活動分子、木棉の多い黑いズボンにジヤケツ一枚、それのないものはルバシカ(シヤツ)一枚の上にロシア製の粗末な冬マントーを着てゐる黨員達は學長に好意を持つてゐない。

「あなたは自由主義者です」と、云ふ者もある。「官僚主義者である」と、か「アカデミツク」とか、あらゆる反プロレタリア的の術語をあびせかける。

一番大物の學長は無難で淸黨を濟した。次には西伯利亞生れの一學生で黨生活も若く鐵道從業員であつたので何事もなく通過した。

その次にはウクライナ生れの支那科の學生の番になつた。彼は國內戰時代に一度外國へ脫走した疑問があり、その妻の身元は不詳である。さらにその父は富農であり檢擧にあつてゐるのを隱してゐた、と言ふ理由で除名してしまつた。

黨から除名！　俎上にあつた魚の切られた後へ上つた者は同じ支那科の一學生である。

彼はサマールの勞働者の家に生れ、自からも金屬勞働者である。勞働中學時代にトロツキー派に加盟してゐた、彼はそれについて

――われ等の黨の細胞は全部トロツキー派であつた、で私もそれに盲從しました。何故ならば、その頃の私は政治的意識が未熟であつたからです――

「お前はずるいぞ！」

と、叫ぶ學生もある。かと思へば、

「十一月の黨反對デモに參加しただらう！」

と、自席から叫ぶ者がある。彼は平然として、――否、私はあの時家にゐました、――と、答へる。

「お前は仲々ずるい奴だ！」

會場の中はドット笑聲が起つた。

今度は日本科のシゾーが立つた、彼はよく出來るので、グループから反感を持たれるやうな事さへあつた。

彼はその經歷を全部語つて來た。そして最後に不安らしく頭を傾けて――私には一人の妹がありました。彼女は非黨員でわれ〳〵の學校の講師朱さんと結婚しました。――と言ひ終つた。

「シゾーは生産部間では黨のアクチビストであつたか知れなかつたが、學校へ來てからは全く別の人間になつた。學校内の職業組合の代表をしてゐた時に多くの不純分子を取り入れてゐるし、前の學長時代に日本科の廢止が提唱されるや彼は第一番に贊成して煽動にあたつたものである。彼は黨の東方工作などには全然無知である、黨中央部、あるひはルナチヤルスキーの演說等によつて大學の東方政策が確定し日本科の廢止が取り消されるや、彼は同志をさしおいて漁業組合の囑託生となることに成功した。……故に私は彼に對して追從主義者、機械主義者と命名してやります」

シゾーに對する一の攻擊が終へると次の攻擊が初まる、

「他の同志が彼の冒險家であること、政治的に無定見であることについて言ひましたから、私はそれを再び繰り返しはせん。……黨員として最も不適切な事は彼に階級的の觀念のない事です。彼は自己の立場をのみ考へて朱に、政治的に危險な人物！　にその妹を呉れました。それは彼が小ブルジョア的であり非革命的分子である、と言ふ一例であります。故に私は彼を黨から除名することを提議します」

清黨委員は例のやうに額を寄せ集めて協議をしてゐたが、シゾーの除名を黨細胞に附議すると宣告した。そのため非黨員は一時退場さし議決を取つた。結果は懲戒に付して除名は延期と言ふ條件で無事になつた。

マニウルスキーはその演說のうちに――生れ落ちるからのコンムニストはない、と言ひ、―

―百パーセントのコンムニストはない、――と言つてゐた。その通り完全なコンムニストは少ない。清黨に出る誰れも彼も誤謬を指摘され批評された。

檜山の働いてゐた學校では、毎夜毎夜清黨が續行された。「彼は除名された、彼は除名された」と知つてゐる學生の名が悄然とした姿と共に眼の前に現れて來る。しかし時々は區委員會の方で除名を取り消した、と言ふやうな噂も耳へ入いつて來る。

黨の新聞もソヴエトの新聞も、そしてモスコー市民の雜談も清黨運動に關することで一杯である。黨員の氣の知り合つた者が寄り集まると、

「極内證だよ、誰れにも話すな……と云ふ前提で、××の清黨では白軍の將校がバルチザンを殺してその名を僞名して黨に入いつてゐたんだつて、それを唯一人知る者がなかつたのに、彼れに離婚された先妻が腹癒せ手段として黨に向つて投書したんだつて……」

「おれの學校では元憲兵が二名除名された」さらに、「×××講習所ではポーランドの探偵が二名發見された。彼等はポーランド人の國籍を有し、ポーランドの黨の細胞に入黨し中央委員會の推薦を持つて入露した、然も彼等のうちの一人の妻は國境地帶に住居して通牒の連絡をしてゐた。彼等はいづれも白軍の將校でポーランドへ脱走したものである、そのため清黨される時に昔彼等の部下にあつた兵卒、今日の勞働者が、彼等が如何なる者であつたかを發見したのである」

と、言ふ探偵小説の話しのやうである。

不潔分子を黨から清掃してしまはう！　と言ふこの清黨運動はその後も幾日となく續いて行つた。

三、寄宿舍の悲劇

その頃檜山は郊外の家に住んでゐた、時々零下二十度三十度と言ふ寒氣の中を三十分歩みさらに滿員電車に二度も乘り替へて學校に出るのは大變であつた。殊に朝八時の講義に間に合ふにはまだ暗い六時に起きて仕度を整へなくてはならなかつた。そして夜の十二時あるひは一時まで清黨に參加して家へ歸ると、もう鷄の鳴いてゐるやうなことさへ度々あつた。

この事情を知つてゐた教務課の書記は――冬の間だけ學校の寄宿舍へ行つて生活したらどう

だ――と薦めて呉れた、紹介された學生は日頃知つてゐた日本科の學生で、機械勞働者で驚細胞の委員である。

彼は寄宿舍のうちで一番良い部屋にその母と二人で住んでゐた。彼の母も勞働者で、すでに五十を越してゐる。よく働き惡氣のない親切なお婆さんで、學生達の身の廻りの物や食事なども世話してやつたり、夜は學生達を茶に招んでトランプやドミノをやつて嬉んでのるやうな無邪氣な婆さんである。

彼女の息子のアレキサンドルは學校から八十ルーブルの給費を受け中學へロシア語の教師として行つて九十ルーブル貰つてのる。その收入は二人の生活費としては多額であるが、いつでも借金がある。學校から借金をしたり前に働いてゐた工場の資金を借り出して來たりしてまだ支拂へない。その理由は彼等母子とも酒がすきであるのと、氣がよくて人を集めて御馳走してしまふのである。

この家は家庭を離れて組織にばかり働いてゐた檜山に取つては新らしい、別な世界であつた。家へ歸つて勉强は出來なかつた。しかし、家庭の生活を學ぶことが出來た。ヲトカーを呑むこと、餡を喰べること、ギタや手風琴を引くこと、カルタをやること、歌ふこと、ロシヤダンス等々。

その夜も常のやうに彼等の家へはおそくまで學生の誰れかが來て茶を飲んだり雜談をしてゐて歸つて行つた。

學生の母は入口に近く、アレキサンドルは北側の壁際に、檜山は一番奥の壁に沿つてある寢臺に寢てゐた。

突然ゆり起された、まだ夜半らしく電燈がよく光つてゐる。半無意識ではあつたが、

「ジャンが今自殺をした、ピイストルでたつた今！」

學生の母は驚いて涙聲であつた。そしてあはてながら毛の襟卷で頭部を卷きながら、素足に防寒靴をはいて出て行つた。

學生のアレキサンドルのペットも突然の事變に飛び起きて行つた、と言ふ形勢だけが殘つてゐる。

ジャンはタタル人で支那科の二年生である、學校ではなくアレキサンドルの家へ來てから知

り合ひになつた、そして懇意になつた知人である。

彼はもう三十を越した舊い黨員で地方の民警の署長のやうな役をしてゐた。彼には小柄で可愛いゝ妻があり六歳を頭にして三人の幼兒がある。それのみでない彼の妹、それから妻の母までも保養する責任を持つてゐる男である。冬の夜一週に幾回となくジヤンはその家族、妻、妹を連れてカルタやドミノをやりに來る。そして大方二十三十と言ふ小錢を敗けて行く、勝つても持つては行かないやうな男であつた。ある時アレキンドルを訪ねて來たが留守であつたので檜山と支那字について話してゐたが、

「學生としての給費と夜學校で貰ふ月給ではあの大勢の家族は養ひ難い、殊に妹は昨年の夏、工業學校の寄宿舍で劇藥自殺をして、やつと生命だけ取り止めたが、あの通り青い顏をしてゐる。どうも暮しが困難だ！」

と、こぼしてゐた。

黑髪、黃色い皮膚、茶の目、人の好ささうなジヤンを思ひ出した檜山は、身仕度をしてから廊下へ出た。實に靜かで氷つた雪、風に吹き込れた粉雪が廊下に横はつてゐる。

部屋を閉めないまゝで階段を下りた。向側の一階のジヤンの部屋では只ならぬ樣子で、人々の立ち騷いでゐる蔭がカーテンを通じて外にまで現れてゐる。

ジヤンは苦痛に耐へかねて唸つてゐるが意識は不明である。傷は幸に急所を外れた左肺部の下であるが、彈丸は小銃の彈丸と同じロシヤ製の×××ピストルである。

赤十字の應急車が來た、重態にあるジヤンは擔架に乘せられて車の中へ入れられた。

彼の家族の者、彼を送つた知人達は、いづれも暗い顏をして各々その家へ歸つて行つた。

アレキサンドルも彼の母も、そして檜山もその夜は非常に昂奮してしまつた。

「お茶でも飲もう！」

彼の母はさう云つてプリモスにアルコールをつぎ、湯を沸し初めた。

ジヤンの自殺について彼等二人の語るところによると、

「その夜學校の清黨においてジヤンは除名處分を受けた。その理由は彼がブルジョアの家に生れたこと、彼がその妻を暴力によつて制裁すること等で、しかもそれ等の事實であるかないか不明の材料を供給した者は、ジヤンと隣同志として住んでゐる同じ科の學生であると言ふ。神

經質なジャンは除名處分を受けると絶望してその儘家へ歸つた。例のやうに夕食も取らず家族とも言葉をきかず、彼は机の前に座つて一心に永い手紙を書いた。その遺言にも當る手紙は黨の書記長スターリンに宛てたもので、約三十頁もある」

ジャンの遺書はその一部を彼の妻およびアレキサンドルなどが讀んだ。

……黨はプロレタリアトの家である。家を追ひ出され、黨を失つて私は生きることは出來ない……

と、云ふ冒頭の句から彼の除名處分が事實と相反する不當の制裁であることを書き列べ、さらにその妻と三人の幼兒までも死の道づれにして行くことを書いてあつた。

彼の自殺が學生の間に傳ると、學校の黨細胞では委員會を開いて彼の遺書を基礎として證據調べを行ひ、その結果除名取り消を發表した。

外科病院へ收容されて數日の間危篤であつたジャンは、段々と良好になつていつた。彼は二ケ月の入院後全快して退院した。進級試驗を受けてゐなかつた彼は停級し、昨年の一年生と一緒に勉強しなくてはならないやうになつた。

ジャンはその身體のために、また氣持の上からもモスコーを退去する決心をした。そのためソヴエトの中央部へ行つて交渉し、チフリスの民警の署長の役を探し出して、其處へその家族を連れて行つてしまつた。

學校では清黨運動を中心にして種々の悲喜劇が起つた。そして、その噂がしばらく續いたが清黨がすむとまた元の靜けさに返つた。廊下の壁新聞には清黨を前にして頭痛してゐる黨員の漫畫はなくなつた、その代り五月一日の準備のための記事が新らしく張り出された。

四、赤軍司令官の家

(1) アリーヤ

三月になつた、しかし、モスコーはまだ冬である、雪で何處も此處も一杯である。

サドバヤ、トリオンフールから(5)の電車が行く、最新式で乘心地が良い。終點で下車すると學校の寄宿舍がある、檜山の住んでゐる部屋も明りが點火いてゐる。

家へ入ると、

「お客がある」

と、アレキサンドルの母から一人の娘と、その弟と言ふ少年を紹介された。

娘は十七歳でアリーヤ、ヤオスラグ、ベネロバヤと言ふ。弟は十六歳で程なく試驗を受けて航空隊に入隊するのである、と言つてゐた。

姉も弟も純ロシア人で白い皮膚に青い眼、ブロンドの髪、中背である。彼等の顏にしても、態度にしても都會人らしく洗練されてゐて立派である。

例によつてアレキサンドルの母はカルタやドミノで客をもてなした。

夜食のために何か買つて來やうとして母は出て行つた。アリーヤの隣りに座つてゐたアレキサンドルはふと頭をあげて檜山の方を眺め、

「この娘、氣に入りましたか？」

と、英語で囁いた。

言葉の意味よりも言ひ方が妙なため檜山は苦笑してしまつた。本人のアレキサンドルも笑つてゐる。かう言ふ無禮の仕打ちに娘のアリーヤは怒り出した。

「今、何と言つたのね！　何と言つたの！」

と、檜山に迫つて聞いてゐたが、遂にアレキサンドルの方を向き直つて苦情を訴へてゐる。

アリーヤが機嫌を惡くしてゐるところへアレキサンドルの母が歸つて來た。

彼等は茶を飲んで、歸りがけに、

「あたし達の方へ遊びに入らつしやい！」

と、言ふ言葉を殘して出て行つた。アリーヤを怒らしたアレキサンドルは電車道まで二人の客を送つて行つた。

アレキサンドルの母は歸つて行つた娘について、

「檜山、お前航空軍司令官で革命軍事參議官のイワノフを知つてゐるだらう！　アリーヤはあの人の姪ですよ！　彼女の父はバルチザンで赤軍の司令官であつたが、國內戰で戰死してしまひ、母は病死し、今ではお叔母さんの家に養はれてゐる。可愛想な娘ですよ、向ふでは家のアレキサンドルに貰つて貰ひたいやうだが、アレキサンドルはいやだと云ふ、何なら、お前貰つ

たらどうだ！」

アレキサンドルの母は勞働者だけに話しに掛引きがなく手取早い。

その後一週間の時が經てからであつた。まだ明るい土曜日の午後、アリーヤの叔母さんは例の甥を連れて遊びに來てゐた。

三十八だと云ふのに子供のないせいか非常に若く見へる。金髪を短かく斷ち切つてセルロイドの櫛で止め、純白の絹の下着を黄色いネクタイでしめてゐる。高い、そして明朗な聲であるが、早口で言ふのは熱情家らしい、男のやうに物判りのよく、さつ張りしたところがこの叔母さんの特徴である。

「ロシア語は皆判りますか？」「あゝ皆判る、判る！」

と、言ふやうな言葉から、

「あたしの最初の夫は陸軍の將校で、東京ロシア大使館に武官をしてゐました、しかしあたしは日本には行きませんでした。日本の絹と染色は一番あたしの氣に入りますわ、しかし今はもう買ふことは出來ない。……あなたは暑中休暇には日本の家へ歸りますか？」

彼女は檜山の黒い髪の色を眺め、

「あたしの今の夫はタタル人ですから丁度この人のやうな髪の毛よ、あたしには烏のやうな黒い髪の毛が氣に入りますわ」

彼女は種々の話題へ入いつたり、出たりして話を進ませてゐた。時が來たからと、言つて辭去しながら、

「葉書を上げますから、みなと一緒に遊びに來て下さい」

と、元氣よく出て行つた。

十日も經つてからアレキサンドルの母は「手紙が來たから遊びに行かう、この間彼女に五ルーブル貸したから今度は返して貰つて來る」

と、言つた。

その夜、食事を濟ませるとアレキサンドル、彼の母、檜山の三人が電車に乘つてペテロブカにあるアリーヤの家を訪ねだ。

彼等と彼女等とは遠縁にあたる、しかもモスコーに住居してゐながら、家庭には往來してゐ

ないらしかつた。彼女等の家の番地が複雑してゐるため雪に吹かれながら暗い路次を三十分程も探して、買物に出て歸るアリーヤの叔母さんと邂逅したので、彼女に附いて行つた。

ペテロフカの街には煉瓦造りの大建物が幾つか空に聳へてゐる。小路を入いつて門を潜り中庭を曲つて、さらに中庭を横ぎる、と言ふやうな徑であつた。

中庭から大きな梯子段が二階へ掛けられてゐる、入口は極めて小さいので腰を曲げて二重になつて潜つた。

「あちらへ、どうぞ！」

アリーヤの叔母さんにさう言はれて外套を脱いでゐると、アリーヤと弟も來て、三人の者を一室へ案内して呉れた。

部屋は四米平方位の眞四角なそして天井の低い、昔の物置きか何かを直したやうな風である。左の壁際には小さい鐵製のベットが三つ並べてある。そこには空軍の將校が二人、それからアリーヤと弟、弟はベットがないので床に寢る、と言つてゐた。

部屋の中央に据えてある長方形の大きな机にはすでに三人の赤軍の將校、それから化粧をした婦人とが座つてゐた。

名乘つたり、紹介して貰つたりして彼等三人も座についた。

赤軍の將校達は自分も遊べば客も遊ばせる事が上手である。歌も歌ふし、ダンスもする、それから謎もやる手藝をやる、カルタも、ドミノも座談もする、「山本代議士」などの話しを引き出して來る。

客に來てゐた幾組かの男女が去つてしまつた。殘つた者はこの家の家族と、彼等三人の客である、家の主婦にあたるアリーヤの叔母さんはまた、サマワールに水をさし、火を入れ、茶の仕度をし初めた。

（2）アリーヤの叔母さん

アレキサンドルの母にしろ、アリーヤの叔母さんにしろロシア人である。彼女等は西歐に見るやうな近代的な經濟觀念を少しも持つてゐない。その日、物を得れば人を集めて、彼等に喰はし、自分でも喰つてしまふ。金を持たうとも欲しなければ貯蓄をしやうともしない、それは

決してロシアの女だけの習慣ではない、男の方がさらにそれが強化されてゐるやうである。彼等は立派な服裝をしない、木綿やシュスのルバシカ一着で取つた金は飲んだり喰つたりしてしまふ。

西歐ヨーロッパの市民の生活慣習が主として個人主義的であり、自主的であるに反して、ロシア國民は集團的であり、他主的である。

レーニンは「コンムニズムは勞働の强化された最も困難な處に發生する」

と、言つてゐる、それ以外においてロシア國民がコンムニズムの溫床になつたのは、かう云ふ人情深い國民性に求めることも出來るだらう。

アリーヤの叔母さんはミシンを持つてゐた、そして裁縫が上手であつた。で、檜山はその後もレンコートの袖や裾を直して貰つたり、シャツやズボンを仕立てゝ貰ふため訪問した。

アリーヤは非黨員であつたが種々の機關から推薦狀を貰つて助醫學校へ入學した。モスコー河を渡つてさらに二十町もある距離を毎日電車に乗らないで、徒步で通學してゐた。

アリーヤの叔母さんの部屋は小さいが明るい部屋である、部屋の壁には現在航空軍司令官をしてゐる長兄、その弟のアリーヤの父などの昔の寫眞がある。いづれも帝政時代の士官學校出で參謀のマークを着けてゐる。

「多分貴族出の家族かも知れない」と、檜山は考へた。

「叔母さん、あなたの所は昔金持ちであつたでしよう？」

「あゝ、昔しは馬車が二臺あつたわ！」

アリーヤの叔母さんは針を動かしてゐるが何か考へてゐる。

「檜山、日本でも今の若い婦人は一人で、男を二人も三人も持つてゐるの？」

と、突然尋ねた、

「さあ！　あるかも知れないが少ない、しかし男では澤山ある」

「あたしたち、ロシアではさらにある」

彼女は顏をしかめて、冷めたく笑つた。

「この間、こゝへ來てゐた美くしいマダム、あの方あたしの知つてゐるだけで三人の男を持つてゐるわ……あの人の主人はもう五十近い年で中央アジヤに働いてゐて、毎月彼女のところへ

送金してよこすのよ、それだのに彼女はそんな生活をしてゐるわ、この着物！　これはあのマダムの着物ですよ」

彼女の言葉によつて檜山はこの家へよく來て、こゝに居るまだ若い將校に送つて貰つて歸る口紅の若いマダムを考へた。

アリーヤの叔母はこの前頼んでおいた就職の口を見に行く、と言つて外出の支度をし初めた。學校へ行く時だけ叔母さんの立派なジャケツを借りて着てゐるアリーヤは、彼女が外出すると、聞いてすぐそれを脱いで返しに持つて來た。

二人の者は一所に彼女等の家を出た。

「檜山、今度お前の家へ來る時にはあたしは多分工場へ行つてゐますわ……家に働いてゐたんでは權利のない女ですが、女工になれば立派な女になれ食料品も着物でも買はれます、さうすればあたし、もつと自由になれるわ！」

彼女は道を歩きながらその近くに持つてゐる計畫を語つた。そして檜山と握手して大通の方へ急いで行つた。

檜山は彼女に仕立直して貰つたレンコートを持つて一丁程の道を歩いた。そして家の方へ行く乘合自動車の來るのを待つた。

第二章　雪の赤色地帶

一、伯林出發

二月の末であつた、ルーテンドルフ街にある家へ歸ると、

「入國を許可する」

と、言ふ通知が來てゐる。非常に困難だと聞いてゐた入露の手續が僅か十幾日で濟んでしまつたのは意外であつた。

短かい間であつたけれども伯林は巴里に比較してずつと住みよかつた。同じプロジョア共和國にしろこゝにはまだいくらかの政治的自由が殘つてゐた。それのみではないブューロー廣場のリープクネヒイト・ハウスを見た時にまた街頭におけるロート・フロントの行進を見た時にこの國が世界で一番古い勞働組合と權威のあるプロレタリアト黨を持ち、マルクス、エンゲル

ス、ペーベル、ルクサンブルグ、リープクネヒート等を產み出した國である、と思ふとなほ踏みとどまつて居たいような氣さへした。

「明日、伯林出發モスコーへ」

永いそして變つた汽車の旅を憶ひながら檜山は入露の準備をした。

丁度一年程前である、巴里にゐた頃檜山の友がモスコーへ出發した。その時彼は幾日かゝつて入露の準備をしてゐた。最後に檜山は彼の荷造りまで手傳つた。彼は毛布と手袋を買つて來た。それから內側へ毛の生へた靴やワイシヤツ、靴下、シヤポン、襟卷ついには彼の日常使用してゐた茶器、アルコールランプまでトランクの中へつめこんだ。

彼のモスコー行きを知つたその知人達はモスコーにゐる子弟のためにと云つてワイシヤツ、やジヤケツの古い物まで持つて來て託送したので彼は荷物の處分に困つてゐるようであつた。

彼は巴里を立つた。しばらくすると一通の手紙が來た。

――親愛なー　親愛なー　同志ー　君はどうして舊い腐つたブロジョア文化の巴里などにゐて勉强するのです。早くこちらへ來給へー

モスコーの空は赤旗で赤く、地の上は雪で眞白である。街上には武裝した赤軍がゐる、しかし巴里のように亂暴なポオリス群はゐない、――

と、書いてあつた。

檜山に取つてこれは一同志の消息を知るだけの手紙であつたが、今日は自からそのモスコーへ行く身の上となつた。

伯林の驛にはすでにモスコー行きの列車が入ゐつてゐた。

約一ケ月前巴里を追放された時の思ひ出は激しい怒と悲しみであつたが、今は平らかな希望の旅である。

長い夜行列車は除々としてプラットホームを離れた。

送つて來て呉れた人々は見へないようになつてしまつた。室へ入いると向ひ合せに一人の若い婦人が座つてゐた。彼女はゲツチンゲンの大學にゐて、數學の講習を終へ今モスコーへ歸る途である、と。

初めての道連れには丁度いゝと思つたが、彼女はワルソーにゐる親類の家を訪問するために

其處で下車する、と言つてゐた。

白い麻のような髪を解いて束髪に卷き初めた。」

「ソヴエトの女學生は皆斷髪でしよう？」

と、たづねると、彼女はたゞ、

「あたしには夫がありますよ」

と、答へをえらひ方へ引張つて行つた。

結婚したからと言つて斷髪の出來ないのがソヴエトの習慣ではあるまい！　檜山には可笑しくなつた。

「何故！　あなた笑ふんですの？」

彼女に眞自面になつて言つた。そして夜着に着替へると遠慮なく横になつてしまつた。

汽車は段々と北へ進行して行く、もう二月の末ではあるが東北獨逸はまだ冬である。

車窓の外は月に照らされて明るい、廣漠とした平地には雲が消へ殘つてゐる。淋しい寒い地方！　夜のうちに東北獨逸を通り過ぎてしまつた。

汽車は停車してゐる、こゝはもう獨逸とポーランドとの國境である。

ポーランドの稅關吏、粗野で不潔なそして官僚式な稅關吏群がぞろ〳〵と列車の中へ押し寄せて來た。檜山には本がある、こゝまで持つて來て――ファッショ政府に沒收されるのか――と、心配してゐたが無事に濟むだ。

しかし前のフローは大騷ぎである。トランクは全部底からひつくり返され、獨逸で買つて來た毛糸のシャツ、靴下、靴、子供の帽子までも悉くスタンプを捺され、關稅を支拂はなくてはならないようになつた。

「こんな品物にそんな高い關稅を支拂ふなら捨てた方がいゝわ！」

ポーランドの稅關は元價の二倍にも相當する關稅をかけるので、彼女はハンドバツクを無意識的に開けるには開けたが、腰掛の上へ選び出された品物と自分の手にある紙幣の價値とを比較してどうしようか？　と困つて考へてゐた。

汽車は國境を越した。そして東へ！　東へ！　と滑走してゐる。

窓ガラスの曇りをふくと、新らしい朝が、平地の上へ現れてゐる。簡素な、空漠とした朝で

ある。

ヨーロッパ大陸のうちでも佛蘭西、獨逸の國土は沃へてゐた。そして農家も明るく、見すぼらしいのは少なかつた。然し一度ポーランドの國土へ足を踏みこむと急激な變化を發見する。背の低い雜木が痩せた土地の上に立つてゐる、雪の中から貧しい農家が現れる、古くてどこが屋根だか壁だか判らないような家だ、煙も立つてゐない、歩るいてゐる人も見へない、農村とは云へあまりに荒漠とした生活である。

ポーランドの土地は、ある時はツアーニズム又ある時は獨逸帝國主義によつて植民地化されてゐた。殊に大戰においては幾多の犧牲を拂ひ極度に疲弊した國家である。現在農業工業國としてのポーランドの經濟的發達に對して大きい桎格となつてゐるものは、工業國獨逸、さらにソヴエト・ロシアの外國市場における進出であらう！

ピルスドスキーの獨裁は、この貧しい哀れな國民に對して苛酷の重稅を課し、自由を壓迫する。都市における勞働者、小市民の生活の困窮と結びついて、半飢餓狀態にある農民大衆が武裝的反亂を起す原因は、こう言ふ社會生活に條件づけられてゐるのであろう。

日はもう空に高く昇つてゐる。晝食のためにレストラントへ入いつた。定食を注文したが澤山の皿を次から次へと運んで來る、しかし中味は貧弱で味も良くはなかつた。

檜山はポーランドの貨幣は持つてゐなかつた、で、獨貨を支拂つた。ボーイはいくら出しても「まだ、まだ」と、云つてゐる。計算してみると伯林の七八倍もする。日本貨に換算すると拾五圓以上に當る晝食である。

いつのうちにか汽車はもうワルソー市の郊外を進んでゐる。小さな民家と教會、荷馬車や電車などの走つてゐるのが目に見へる。

ポーランドの首府ワルソー——雪の中からかなり廣汎な地域の上に復雜した市街の外貌が一劃々々と現れて來る。

ワルソー驛は廣く大きい、幾つか並んでゐる列車は黑煙をかぶつて騷音をたてゝゐる。

プラットホームには旅行者に混つて角帽の巡査が幾人も立つてゐる。黑い服裝の上にピストルを携げ長劍を持つてゐるのはファッショ政權の支持者、實行者らしく、親しまれない、信じられない不安を人々に與へてゐる。

ワルソー驛では何となく不安であつたが何事もなかつた。汽車はまた東行しはじめた。夜があけると、いつの間にか東部ポーランドを通過してしまつてゐた。

朝、心持ちよく晴れた山地の中に汽車は靜に停つてゐる。廣渺とした白色銀の原、その中に黑色の林がある。鳥も、野獸も住んでゐるような未開地である。

停車してゐる列車の周圍には兵卒だとか稅關吏だとかが雪を踏んで立ち廻つてゐる。

國境！　フアシズムとボルシエビズムと相對する、黑色地帶と赤色地帶との接ぎ合さつた離れあつた國境地である。

雪の上には、一時的に造つた假小屋、垣などがある。多數の稅關吏が出て來て荷物を調べてゐる。

赤旗が飜つてゐる。カーキ色の長いマントー、大きな星の徽章のついた防寒帽、着劍の銃を握つて步哨に立つてゐるものは赤軍の兵士である。Arbeiter Illustrjete Zeitung で見た赤軍の寫眞そつくりである。

乘車券を賣る小さな建物の前には、――國際列車寢臺券發賣所――と日本人や支那人に判るように書いた木の看板がかゝつてゐる。

自然も人も文化もずつと亞細亞らしくなつた。自分の國へ近づきつゝある。と言ふ感じが一層深くなつた。

小さな驛にはネゴレロイと記してある。雪の中に荷物を下して列車の來るのを待つた。

雪、雪、雪ばかりの中から二本のレールが直線を描いて雪の中に消へてゐる。

黑い怪物が現れた。ゆるやかに地を震して大きな客車の列が押されながら近寄つて來る。

國境で受け取つた寢臺車の番號を見ながら自分の乘る客車を探した。

モスコー行きのこの列車の中には、あらゆる國籍を有する人々が乘つてゐた。その內最も多數を占めるものはプロフインテルン世界大會に出席するためにやつて來た西歐諸國の勞働組合の代表である。その次には本國へ歸還する外交官とその家族、技術者、勞働者等であつた。

汽車がミンスキ驛を出發した頃食堂車へ出た。ソヴエトの國境へ着くまで互に知らないふりをしてゐた人々も、今日は大びらに口をきき合つてゐる。巴里で顏見知りの佛蘭西の勞働組合の代表たちは、

「どうだ、よく眠れたか？」

などと言ひながら熊手のように大きな頑強な手で握手して行く。

東へ！　東へ！　と走つて行く汽車の窓からは雪の大平原が水平線の彼方まで續いてゐる。山もない、谷もない、また川もない、坦々とした平地の中から白樺の林が、舊い農家の散在してゐるのが僅に無人の境と云ふ例へを否定してゐるばかりである。雪橇を引いた馬が一頭走つてゐる、熊か何かの座つたように車臺に座つてゐる駁者、その後から馳けて行く黑い犬、單調な自然とそれにふさわしい極めて原始的な人間生活！　それは今始まつたのではない舊い傳統の上に立つものである。しかしその生活は西歐諸國のように古びて、行き詰つたものではない。まだ幼稚なかわいゝ生長しようとする若々しいうごめきを持つた生活である。

廣大なロシア、長大なロシア人！　その土地と人とをもつて遠大な理想を目標として新らしい社會を建設しようとした人はレーニンである。

僅かの間汽車の停る驛は小さい。別に遊びに行くところのないような村の娘や子供達は汽車見物に來てゐる。そして彼等はこの通り過ぎてしまふ客に向つて――萬歲！　をあびせかけたり、友達のような會話を取り交してゐる。

檜山は飲まないが、それ以上に喰ふ、そのため食堂車のボーイと心安くなつた、狹くて暗い自分達の部屋より明るくて廣々としたボーイさん達の部屋の方がはるかに良い。で檜山は彼等のところで座りこんで初めて見るロシアの風土を眺めてゐた。

積雪で眞白な地の上へまた大きな雪がちら〳〵と降つてゐる。空は低くたれてどんよりと曇つてゐる。幾層かの雲にさへぎられてどこにあるのか日の光は認められない。

夏ならばさだめて美くしい綠林の中であらうと思はれるような白樺の密生地帶を過ぎて行く。こゝは今冬である。光りを放つような銀林である。

自分の部屋へ皈つた、國境から同乘して來た勞働者はロシア人であるが獨逸語も出來る。

彼は何かの理由で獨逸に出てゐたらしい。それからハンブルグへ行つて造船所の職工になり熟練工になつて、そして安定したロシアへ歸國が出來るようになつた、多分レーニングラードの造船所へ行くのであらう！

彼は長靴を脫いだ、そしてその中へ手を入れて何か探してゐるようであつた。しばらくする

と十ルーブルの札束を幾つか掴み出して檜山に見せた。

百マルクの金貨で五十ルーブルにしか換算出來ない檜山には羨しい程の大金である。

彼は他の足を脱いで、

「まだこゝにある！」

と、言ひながら隱してゐるルーブル紙幣の束をまた掴み出して檜山の鼻の先へ見せつける。

彼は多分ルーブルをハンブルグで極めて安く買ひ集め、非合法な手段によつて國境を持ち越したものであらう！

檜山はまたボーイさん達の部屋へ行つて暖を取つた。檜山の言ふロシア語は赤ん坊より判り悪い。彼等のうちの誰かが顔や手眞似を讀んでロシア語に通譯して呉れる。

「あゝそふか！」

「いやちがふ、彼はこう云はふとしてゐるのだ！　そふだらう！　おれはそう思ふ！」

言葉の通じない檜山を取り卷いて彼等は日本の汽車の話しをしてゐるのである。皆手前、手前に合點して判つたような顔をしたり感心したような顔をしてゐる、珍妙な會話である。

オルシヤの驛を、それからスモレンスクの驛を過ぎた。小さな驛にレーニン、スタリン、ブハリン、ルイロフなどの寫眞が掲げられてゐる、毛皮のマントー。それから赤い布で髪を卷いている娘、スキー、スケートなどで往來に動いてゐる少年や青年達、粗野な單調な歌を歌つて行軍してゐる赤軍の小部隊！　ロシアの内部の生活が段々と濃厚に現れて來た。

ビヤジマ、モジイヤイスク、雪をけたて〻進む汽車はソヴエト、ロシアの心臟、赤いモスコーへ向つて驀進して行く。

二、モスコー（その一）

雪のクレムリン

「單獨でモスコーへ行くには非常な困難があらう」と、伯林に居る頃考へた。しかし二日間のうちに知り合ひになつた人々は種々な便宜を計つて呉れた。そう云ふお蔭であつたのか無事にモスコーに着くことが出來た。

二、モスコー（その一）

ヨーロッパの各都市を通過して來てモスコーに着く、その土を踏んで第一に感じたことは、「革命のあつた都市」「プロレタリアトの都市」と、言ふ政治的な社會的な印象である。

破壞されつゝある建物は崩壞した舊文化の遺跡である。建設されつゝある建物は新らしい文化の表徵でありその生活力の表現である。

沒落すべきもの廢滅すべきもの、新興すべきもの發展すべきもの、この二つの物の存在がはつきりと對立して目に入いる。

明るみがある、暗がりがある、動いてゐるものがある、止つてゐるものがある。呼んでゐるものがある。默つてゐるものがある。笑つてゐるものがある、泣いてゐるものがある。

戰ひに勝つたものは××××××である。彼等は政權を持つてゐる。新らしい支配階級である。彼等の顏は明るくその生活は積極的である。これに反して舊い文化の支持者であり、戰ひに敗れた人々の顏は暗く、その生活態度は懷疑的であり受動的である。

新と舊生れるものと、死に行くものとの二つの世界……都市モスコーの中には、その二つの對象が明白に人の生活を通じて渦き合ひ、もつれ合つてゐる。

過渡期の社會！　交通勞働者の建設した大なるコンクリートの合宿所、そこの前の舗石路には幌馬車が鞋ばきの駁者によつて方向を變へられてゐる。

大きな國營のマガジンがある。その前に小さな露店臺の小商人が客に取り卷かれてゐる。

七八階の高莊なアパートが建つてゐる。その隣りには二階建の木造家屋があり柵がある、そして鷄が遊んでゐる。

教會は廢滅しかゝつてゐる、しかし拜禮する市民の群は澤山ある。

彈丸に破壞された道路、燒き拂はれた家は、その儘に殘つてゐる。その反對の方の地劃には赤旗を幾つも空高くなびかせて建築工事が進んでゐる。廣く高く組み合された足場、機械の音人の動きが激しいテンポで建設されつゝある都市の一部面を窺はせる。

ロシアと云ひモスコーと言ひ、檜山に取つては全く新らしい土地である。

一個の荷物を驛に預け、一個の荷物を手に持つてタクシーに乘つて、行く先はコンミンテルンである。

自動車の除行しだした時に、停止した時に、街の生活をながめる。プロレタリア政權の社會的反映とでも言はふか市民の生活は雜然とした自由の中にある、――どんな事をしてもかまわない、どんな物を着てもかまわない、自分以上の×はなくまた自分以下の×はない、敬する×もなければ、怖れる×の存在もない！

ところどころに眞赤な家がある。大きな赤旗をたてたデモの行列が通つて行く。

寫眞や繪で見たクレムリンの壁は高く赤い。

雪にうずもれる大い廣場の前にタクシーは停つた。白い六階だての大きな建物がある。

その建物はレーニンによつて一石一石宛積みあげられた、と云ふ第三インタール・ナショナルの執行本部である。

ドアーを開けて受けつけの前に立つた。黑い斷髮、黃色い顏多分ユダヤ人であらう、受けつけの女はロシア語の出來ない檜山に、

「北山はゐない、こゝへ行きなさい！」

と、檜山の訪ねた北山の住所をロシア語で書いてくれた。そして彼女は――遠くないから歩んで行ける――とつけ加へて呉れた。

檜山は少し歩るいて、迷ひそうになると、マントーのポケットから例の紙片を取り出して、なるべく學生や勞働者のような若い人達に尋ねる。

荷物が重いので手が痛くなる、道の上へトランクを下して休憩しながら街を眺めてゐる。

通りがゝりの奥さんたちが、

「そんな事をしてゐると荷物を取られますよ」

と云ふ注意をして呉れた。

ガラス戸の二重張り、廣い大きい待合室、ホテル、ルクスは宮殿のように莊麗である。

ホテルのコーミンダンは私服で勞働者らしい。

「北山はゐない」

と、言ふ返事である。ノートを破つて彼に置き手紙をした。しかしこれから何處へ行こうと考へてゐると、突然、ドリオ氏がやつて來た。

彼につれられてすぐ前にあるソリーズナヤ・ホテルへ行つた部屋はすぐ貰へた、ドリオはプ

ラブダ紙に出す論文を書かなくてはならない、それから友人を訪問しなくてはならない、――明日會はう――

と、言つて別れた。

二日間の汽車の旅であつたが別に疲勞したようでもない、レーニンの組織問題についてをしばらくの間讀んでゐた。

部屋の壁にかけてあるソヴエト革命暦は三月一日を示してゐる。

この季節になれば巴里のブルバールやルクサンブルグの公園にあるマロニエはもう綠色の葉をひらく頃である。セーヌを下つてサン・クローのあたりまで行けば青い芝生や菫の花も咲いてゐる春の季節である。

しかしモスコーはまだ冬である。空も地上も一面の雪にうずもれてゐる。ホテルの廊下や部屋の中にまで氷や雪が轉つてゐる、短い手紙を書こうとしても、ペン先が氷つてしまつて熱を加へなくてはならないやうな寒さである。

眠りから醒めるともう夜になつてゐる。部屋の中は眞暗である。時間を見ると夕食の時になつてゐる。

カラーもネクタイもなしで食堂へ入いつた。

食堂は大きく立派である、芭蕉の鉢植が四五本青々として生氣を放つてゐる。殘り少くなつた卓に四五人の佛蘭西人が話し合つてゐる。

近寄つて行くとトレスやコスト達であつた。

「どうだ、巴里よりいゝだらう！」

コストはビフテキを切つたり、鬚のぬれたのをパンの切で拭き取つてゐる。トレスはリウマニティ紙を片手にナルザンを飲んでゐる。

ヨーロッパは大きいようであつた、しかし、そんなに大きくない巴里の勞働組合やレストラントで一緒になつたこの連中とまたモスコーで顔を合せた。

食堂を出た、それから外出の支度をしてホテルを後にした。

電話をかけると北山は「上れ」と、言つたようであつた。旅行券の番號、姓名などを記入してから、

「行け！」

と、コスミンダンは許可證を與れた。

一階の大きな廊下を鍵の手に行つた。そして部屋の番號を見て、大きな白いドアーをノックすると、

「コン！　コン！」

と。中から英語の聲がした。ドアを開けて入ると、あまり大きくない部屋の中央に只一人きり、北山は座つて檜山の座につくのを待つてゐる。

「あなたが檜山さんですか、僕は北山で……」

北山は世界的に有名な人物である。それだのに檜山は紹介狀一つ持つてゐない。彼は誠に謙讓にそして丁重に挨拶した。

彼は平明なそして率直な男である。人の言葉を疑はずに信じて同情するやうな素朴な天性を失はずに持つてゐる、君子と言ふ言葉に相等する人はなかつたのであらう。またありようはない。しかし北山の人格は君子のそれに近いものであるが、彼においては新らしいプロレタリア道德として表現されてゐた。

その後北山に會ふ毎に、彼と話す毎に、彼に對して親しむ情が增々深くなつて行つた。

したがつて檜山はどうかしてモスコーに滯在してソヴエト・ロシアを知らうとする慾求が多くなつた。

三、モスコー（その二）

（1）白い家

トベルスカヤの坂道の右側に大きな中央郵便局がある。その前を通つて少し進むと白色の大きなビルヂングがある。そこは全世界にまたがつて幾千萬の會員を有すると云ふモープルの中央部である。

雪を踏みながら、雪に降られながら、檜山と北山はこゝへ入いつて行つた。

北山はこゝの次席代表であつた、それのみならず半世期を通じて革命運動の中に生活して來

た彼の名聲は偉大であつた。モープルの責任者達は出來る限りの同志的態度で彼に應待した。

檜山に取つて都合のよかつたことは英國のトレード、ユニオンの少數派で動いてゐたイナ氏がこゝの書記であつた。そして巴里に居た頃細胞の書記をやつてゐた男もこゝのアジ・プロで働いてゐる。それのみではない、モープルの大會のために出席する佛蘭西の代表が偶然にもこゝに來てゐたことであつた。

こう云ふ人達の協議の結果であつたのであらうか、檜山はポリチク・エミグランドとしてロシア政府の保護を受けることになつた。

こゝの書記局の決議が終へ一と通りのアンチトに重要な項目を書き入れ、それが濟むと政治的エミグランド部の統制保護を受けることになつた。

こうして檜山はすぐ自分の身のおきどころが確定した。そうして北山の家へついて行つた。

彼の家から最新の勞働年鑑をかりたり、新聞を貰つたりしてホテルへ歸らうとすると、北山は――これをやるから！　と、云つて彼の家にあつた食器を新聞紙に包んで呉れた。

この貰つた食器が緣となつたのかその後三年間も檜山はモスコーに滯在するやうになつた。

（2）赤い家

ストラスノイからのA電車に乘つてしばらく進むとヴアランソイ・ポリスの街に出る。

この淋しい坂道の中程には廢滅しかゝつた教會がある。そしてその反對側には三階建ての赤い家がある。

この家は多分貴族か何かの住んでゐた跡であらう。本館の他に小さな別館がある。かなり大きな庭がある、そしてまだ細い、大きい、老朽した幾多の樹木が雪の中に立つてゐる。

築山がある、そして草花を植栽するための溫室もある。

この赤い家は、ドモポリチク・エミグランドで全世界から集まつて來た政治的エミグランド家である。

階下と階上とは幾つかの部屋に分かれてゐる。そして共同住宅としてのシステムに組織されてゐる。會議室もある、クラブもある、さらに圖書館もある、階下にはコーペラチープもあり食堂もある。

三月八日の婦人デーであつたと思ふ。

檜山はこの「赤い家」へ客として招かれた。

勞働者、勤め人、子供も居れば婦人もゐるし老人もゐる、ほとんど普通の社會と變りない。

かれ等の中で殊に檜山の注意を引いたのは長髪で偉大な體格をした一東洋人であつた。

彼は朝鮮の無政府主義者で有名な人であつた。テロイズムを實行したので八年間獄にあつて出獄するとすぐ滿洲へ出て、花賣りをしながら徒歩旅行を續け、ウラジオストックに近い國境から入國した人である。

ソヴエトは共産主義の國である。從つてドモ・ポリチク・エミグランドも共産黨員か青共に屬する人達ばかりである、であるのに彼は無政府主義者そのまゝの姿をして生活してゐた。

アナキストは絶對の××を要求する。從つて組織に反對し××を否定する。彼も矢張そう云ふ種類の人であつた、彼はまづソヴエトの組織、および社會制度に對して不滿を持ち初めた。

『部屋の戸を開けない』と言ふ原因から暴力をもちいて扉を破壞してしまつた。その次にはある組織の責任者と喧嘩を初めて、

「お前なんかプロレタリアの皮をかぶつたブロジョアだ！」

と嘲罵して歸つて來たそうである。

個人の自由を主觀的にのみ慾求する彼は階級相互の力の對立關係とか、その場合における政策などは問題にしない。直接に明日の理想をとらへて來て今日の現實と比較して不平を言ひ、攻擊をする分子となつてしまつた。從つて一つの政治的目標をもつて組織され、その目標に向ふ過程としての今日を指導してゐる黨の生活などは判らなかつた。

自由の幼形を探し求めてゐる彼は、ソヴエト・ロシアの現實に失望して——自由の國——を西歐の空に見出した。そしてそこへ旅券も持たずにまた金を持たずに行こうと考へ出した。

ドン・キホーテの旅は實現しなくて國境から歸されて來た。そしてまたもとの、赤い家に生活するようになつた。彼はそこで不滿な生活をしばらくしてゐた。そのうちにまた姿を消してしまつた。今度は森の中で鳥のように捕へられて歸つて來た、それから夏になつた頃である、檜山はこの「赤い家」を訪ねた、しかし彼の姿はなかつた。

彼に同情してゐたブルガリーのある女は「彼はもうしばらくゐない。多分母の居る故郷へ行

つたであらう」と、答へた。

彼はプロレタリアトの國ソヴエト、ロシアを脱出して故郷の朝鮮へ歸つた。そこにははたして彼を安住させる自由があつたか？

理想は人類社會の目標物であらう、現實はそれへつながる一時的の存在かも知れない。

現實、この現實は見憎い現實であらう。しかしこの現實に立てないものは、絶望するものは理想の社會を建設する人とはなり得ない。

「赤い家」を思ひ出すと、檜山はあの長髪大軀の無政府主義者をかならず思ひ出す。

四、モスコー（その三）

（1）クララ・ツエトキン

モスコーへ行つたばかりの頃の檜山は、總てが驚異であり感激にあふれた生活をしてゐた。丁度その頃正確に云へば三月の十八日の夜である。畫のうちからモスコーの各方面の組織に招かれて日の暮れるのも知らずに居た檜山は、數人に連れられてコローン劇場へ入いつた。

そこでは巴里コンミウンを記念するために、モープルで主催した大夜會が開かれた。

モープル側の代表者達、それから各國共産黨の代表者の演説も興味があつたが、檜山に取つて珍らしいことは、巴里コンミウンの老闘士とクララ・ツエトキンの出現であつた。

巴里に居た頃あまり注意もしないやうな第二インテルナショナールの指導者達や、その老闘士などの演説や顔は屢々聞いたり見たりしたが、親しんで讀んでゐた第三インテリナショナールの指導者達の顔は寫眞より外にさらに見たことがなかつた。從つて現實の人としての彼等に對する興味は大きかつた。

在モスコーのリウマニテイ紙の通信員がクララ・ツエトキンの訪問記としてクレムリン内における彼女の日常生活の一般を記述し、

「私は自分のビオグラヒイも書いて見やうとは考へますが、公の仕事に追れてゐるために、どうしてもそれが出來ません」

など云ふ彼女の談話が載せられてゐたのを讀んだことがある。

モスコーへ來てから、北山からツエトキンも今こゝに居て最近會つたとか、さらに話しはさかのぼつて彼女の往時におよび、一九二一年の佛蘭西社會黨の分裂、共産黨の樹立について彼女は巴里まで進出して暗躍したとか、その後の伯林における共同戰線のコングレスの時における彼女の活動などを話してもらつた、その時の餘談として北山はゲードを思ひ出して、

「彼は大臣になどなつたために今では人から忘れられてしまつたが、個人としては憎めない男であつたよ。マルクスの娘の夫であるためかわれ〳〵の運動にも理解を持つてゐるようであつた。彼はどこからか僕の姿を見出してわざ〳〵やつて來て握手を求め――おれ達の仲間から第三インテルナショナールへ行つたものは君一人である、昔の思ひ出、また今日の思ひ出のために、これに署名してくれろ！　と云つて僕のサインを求めてゐたよ……ツエトキンは僕のところへ來ると、殘つてゐるものはお前と私しだけだからしつかりやらう！　と、云つてゐた」

などと云ふ話しを飛び〳〵に聞いて彼女の生活を想像してゐた。

極めて近く實際に見るツエトキンは、寫眞にあるよりは柔和な、平凡な、さつぱりとしたお婆さんである。純白な美くしい長い白髪、赤い顏は血色がよくつや〳〵としてゐる、氣力にいて勝つてゐるのと、絶えず若い人達との交渉や刺戟を受けるので、元氣よく八十の老女とはどう見ても思はれない。赤い襟卷をした巴里コンミウンの老闘士がヴエルサウーの進擊を語り巴里のバリカード、それからその後のテロールを話した。その後にいよ〳〵ツエトキンがトリビウンの前に立つた。滿場から拍手、拍手の襲擊！　連發でしばらくの間は彼女でさへ一言も發せられなかつた。

感喜にあふれる場内の光景に彼女は感激してしまつた。實際そうであらう。永い闘爭の歴史を考へると、彼女の前にゐる大衆の成長は、わが兒の成長したやうに懐かしく見へるに異ひなかつた。

彼女は言葉が出なかつた、刺戟された異常な昂奮はついに彼女を泣かした。

彼女は聲をあげて泣くのであつた。

「私しは何と言つていゝのか！　この盛會を見て……ほんとうに嬉しい……」

彼女のためにはその娘のようなスタソバ。それから孫や子のやうな人達に取り圍まれて彼女はようやく泣くのを止めた。

喜びにしろ悲しみにしろ外部から受ける現象をその儘取り入れて、そのまゝ自己の性情を露出してしまふ純眞な態度！　そう云ふ眞面目な單直な性質の持ち主であつたればこそ永い間を貫いて最も困難なプロレタリアの解放運動に從つて來られたのであらう。

槍山は年取つてもまだあんな熱情を持つてゐるツエトキンの生々とした性格に敬服した。

その後コンアカデミーの學術講演會やその他においてもツエトキンをすぐ近くに見た。その時の印象は氣高い清純などことなく溫かみを持つた女性であつた。そしてプロレタリアトの母である、と言ふやうな柔らかさと威力を備へてゐた。

（2）ベラ・クン

日本人を親愛するハンガリー人でモスコーで名高いのはクンとヴアルガであらう。

ヴアルガが純理論的な人であり、書齋の人であり、また筆の人であるのに反してクンは行動の人であり、街頭の人でありまた腕の人である。

ヴアルガはオースト・マルキストとしてまた農業學者としての權威であつたのに反して、クンは保險會社の下級な社員位であつたらしい。彼は捕虜となつてロシアに居てボルシエビキーの闘士になつた。そして國へ歸つて一九年の三月ハンガリーに於てソヴエト革命を起して、自からはいはゆる大統領の地位についた人である。戰術を誤つたためとチエコ・スラバク、ルーマニア諸國との干渉のため敗北はしたけれ共、彼は――輝ける闘士として重きをなしてゐた。

資本の安定、不安定に對する問題、特に獨逸に於ける勞働問題の見解についてヴアルガは誤謬を犯してゐた。その時のコンミンテルンのプロタコールを讀むと、指導者としてのクインネンはヴアルガの誤謬を指摘して――もう一度マルクスを讀み直さなくてはいけない！

と、結論づけてゐる。

その頃の委員會の席上においてクンはヴアルガのソシアル・デモクラト的態度を攻擊して――ヴアルガ、君はトロツキーと一所になつて――『世界資本主義要定論』を書いて、レーニンに反對であつたとか――古い失敗を暴け出すかと思へば、ヴアルガはヴアルガで――往時クンと行動を共にした×××や×××××やが今日社民黨の陣營に走つてしまつたのに獨り……わがクンのみがわれ等の陣營内に殘つてゐるのは甚だ光榮である――と言ふやうないや味を感

酬してゐる。こふ云ふ喧嘩を見てゐると、クンは小意地の惡い男のやうに見られるが、會つて見ると極めて平凡な、しかも謙讓な人であつた。

その年の晩春の夕方であつた、檜山は北山と一所にトベルスカヤの大通の並木の下をしばらく散歩して、疲れたので通傍のベンチへ腰を下して休みながら往來する人々を眺めてゐた。

雜沓する群集の中から大きな人と小さい人の一對が現れた。小さいのはクンで大きな方は、ベラ・イリツチである、イリツチは、外國文學雜誌の編輯長をしてゐるので前からの知り合ひである。彼等二人は日本人二人の方へ向いて歩み寄つて來た。

クンもイリツチも北山の前に立ちとどまつて極めて丁寧に、

「北山同志今晩は！」

と云つて頭を下げ握手をし、檜山にでさへ、

「日本の同志今晩は！」

と、鄭重な挨拶をした。

丸く太つて背の低い裝り氣のないベラ・クンは田舍の叔父さんと少しも變りない。

ビヤトニツキーを初めて横に見た時に、

「普通の勞働者と少しも異はない」と、云ふ氣安さを感じたと同樣である。

行動の人ベラ・クン、簡單な人素朴な人ベラ・クン、それでゐて彼は溫い心を持つた男であつた。

（3）クイシネン

マルキストとしてはプハリンは世界的である。これはすでに有名な話しである、然しクイシネンがマルキストとしてより以上である、とは知る人は少ないやうである。彼れは恐らく今は世界における革命的マルクス主義者とし第一位の人であらう。

その頃、入露した年の秋であつたか檜山は植民地問題を研究してゐた。その時印度問題について實に立派な論文を讀んだ。誰れが書いたのであらう？　とある人に尋ねたなら、クイシネンの報告である、と聞いた。

マルクスを正しく革命的に理解してゐる點についてレーニンの唯物辨證法を繼承してゐる點

において、實際運動家である點について、彼の如き指導者は、澤山求める事が出來ないであらう！

白髮で無鬚、ミラボーに似たような顏の作りは、すこし痩せ形で、いかにも聰明な學者であり、實際家である、と云ふ印象を與へる。

彼はその子を決して大學へ入れて敎育しない。いつでも工場勞働者の中に入れてプロレタリアトとして大衆の間から生長させしめやうとしてゐる。その頃はこと更に極東のハバロスクへ一勞働者として生活さしてある、と聞いた。

彼はフインランド人であるけれども、アメリカに永らく生活したために英語は流暢である。明快な發音、情熱に走らず冷靜であるが、冷靜でない自信に富んだ彼の英語演說は彼のために英語がどれだけ科學化され、戰鬪的に革命化されるか判らない。そして幾倍か藝術化された言語に變化されてしまふ。

北山の誕生七十年祝賀がモスコーにおいて催された時であつた。彼は美くしい明白な自筆で、

「北山同志の長壽を祝す！　友でありまた同志である、クイシネンより」

と書いた短冊を白い菊花の鉢と共に持たしてよこした。

その當時彼とマニウイルスキーはコンミンテルンの指導者であつたため北山の鬪爭經歷を今さらながら稱揚した。

「……北山はその當時アメリカにあつたブハリンと共に活動した……」

彼は永い事北山について演說した。そして座につこうとした時、その傍にゐたマニウイルスキをとらへて、

「おれはトロツキーとも共に働いた、と言はうとしたがよした、ハツ、ハツハ……」

と子供のやうに罪のない笑ひ話しをしてゐるのを見た。

世界を相手に鬪つてゐる人と言つても彼については過言ではあるまい、今そう云ふ地位にある彼の輕卒さを告白した心情を聞いた時に、

「あゝこの人はほんとうの革命家だ！　トロツキーの誤を憎んでゐても、その人を憎んでゐないー！」

と、ある人は感心して話してゐた。

彼はブハリンの失脚以來今日までコンミンテルンを指導して來た。彼はまだ今後も指導して行く人であらう！

聰明な顏、白髮の人クイシネン！　あの日の雅氣に戲れてゐた姿は、全く普通の市民と變りなかつた。

（4）ラデク

その頃知つた人のうちで、世間的に知られてゐる人のうちに新聞記者のラデクがある。

彼は東洋通でありまた西洋通である、從つてまた世界通である。彼は政治、經濟、文藝等あらゆる部門に亙つて通じてゐる。彼はそれらのものに向つて饒る、書く、しかし彼の饒舌り、書く物は常識の範圍を一歩も出てゐない。よく知つてゐてよく判つてゐない。彼は典型的なジヤーナリストである、その點で彼は第一流であるかも知れない。

彼は現代と云ふ過渡期に生產された人としてのあらゆる長所とか短所とか云ふ特徵を持つてゐるのに反して、その容貌だけは甚だしく時代おくれがしてゐる。彼の顏は細長く全體的に云へば貴族的なと、言へる。それだのに鬚を長く延したり鬚を半圓型に作つてゐるところなどはどうしても十八世期の革命家としか見られない。

彼は新らしいやうであるが舊い型の人物であらう。インデビヂエールが強くて統制に服せない點、部分的にしか知らなくて全體的な結論をつける點、ジヤーナリスト、ラデクが多方面に活躍し多方面に失敗する原因であらう。

（5）五月一日

「國際的プロレタリアトの革命力を示す日」

と、云ふローズングの下に執行されるメーデー、モスコーのメーデーは幾百萬と云ふ勤勞大衆がデモに動員されるので壯觀である。

檜山は永らくモスコーにゐたがメーデーを見たのは只一度であつた。しかもその觀方が極めて突飛な觀方であつた。

モスコーでは四月の三十日までにメーデーの準備が出來る。赤い旗、宣傳フラカートに飾られた全市は大祭日らしい感喜を漲らしてゐる。この日の晩から各組織においては、ミイティング夜會に取りかゝる。

この夜檜山は×××の代表としてプレハノフ大學へ行つた。

この大學は綜合大學であるだけに、非常に澤山の學生を持つてゐる。從つて建物も大きく、ミイティングも盛大であつた。

學生の委員達と話しながら餘興を見てゐるうちに大變おそくなつてしまつた、ホテルへ歸つたのは朝の三時で空はもう明るくなつてしまつてゐる。

音樂の響、歌の聲で、目を醒した、窓を開けて見ると明るく日の光が流れてゐる。大通りに黑い潮のように人の群がどよめき、赤い旗が林のやうに立つてゐる。

伯林のロート・アルメのやうに敵地を進むデモではない、であるからすぐ血を見るような戰鬪的な鬪爭的なデモではない、こゝでは、和氣のうちに談笑のうちに勝利を誇るデモの行進である。

檜山はあわてゝ部屋を飛び出した。昨日組織の人の話したところによると、デモに參加するには自分の所屬する組織に朝の七時までに加盟しなくては駄目である、と云ふことであつた。

朝寢すぎたため今になつてはデモに參加しやうとしても、どの組織でも許さない。

結局自分は取り殘された遲參者になつてしまつた。デモの進行を見てゐるうちに空には飛行機の爆音、街上には赤軍の行進が初まつた。デモに軍隊の參加するのはこゝだけであらう。

デモの一部分だけ見るならこゝでもかまわぬ、しかし全體を見やうとするにはどうしても赤色廣場まで行かなくてはならない。

檜山はそう思ふと、その儘クレムリンの方向を指して突進して行つた。

赤色廣場の近くには民警の警戒が嚴重で、すでに朝から一般の通行は禁ぜられ、組織以外の人は一人たりとも一歩たりとも內部へ足を踏ませない程の警戒網を張つてゐる。

ロシヤ人でない、そしてロシヤ語もろくに判らない、檜山はこの警戒網を突破してついに赤色廣場まで到達した。民警やその監督者達は、よくもこの不法な通行を許したものだと今から考へると不思議でならない。

クレムリンの壁を潛つてイリンカの坂下には赤軍の部隊が徒列してゐる。その間をヴァラシロフは乘馬で迅走しながら、

「同志諸君、萬歲！」と叫んで通過した。

歩兵、騎兵、機械軍の前を通つて赤色廣場へ出た。

甚大なクレムリンの壁には赤い布に、白く書き現されたメーデーのローズングが幾流となく掲げられてゐる。その日に招待された外國の勞働團體の代表、ソヴエトの代表、あるひは外交團體などの高い觀覽席、中央にはレーニンを藏めたトリビウンがある。舊い軍服に皮の帽子のスタリン、皮のマントーを着たブハリン、眼鏡のカリニン黨やソヴエトの指導者等はデモの進行を嬉し想に眺めてゐる。

武裝した工場勞働者、赤いトラブカのコンソモールの密集部隊、白いトラブカの徒列は看護婦軍。工場勞働者の架いて行く大きな漫畫、小學校から大學、研究所の部員まで赤色廣場を徒列を作つて堂々と通過して行く……。

合唱、音樂の響の絕へた刹那には、

「何々工場萬歲！」

「何々大學萬歲！」

と中央のトリビウンの上からはいはゆるソヴエトの指導者達がデモに向つて挨拶する聲が聞へる。百を越へると思ふ程の戰鬪機の低空飛行、拔劍した騎兵の馳驅する姿、その後からはタンク、自動車、自轉車、各砲車軍、最近の機械部隊が現れる。

幾時間の間續いた人の群、旗の波、機械の行進、音樂、歡聲等々、幾多の復雜混合せる大衆行動の中から表出される美は、在來の如何なる藝術も現すことの出來なかつた、生き生きとした力の美くしさを、觀る者に殘して行くのであつた。

クレムリンの大時計は午後の二時を指してゐる。しかし赤色廣場へ押しよせるデモの行進はまだ續いてやまない。

第三章　ボルシエビキーの家

その頃の彼等

(1) 老闘士

研究所からトベルスカヤへ行くには電車に乗つて迂廻するよりは歩んで直行した方が早い。

圖書館に歸つて來た檜山は机の上にあつた本を圖書係に返した。そして自分の書物をポルトフォイに入れると圖書室を出た。

研究所の出口には老人の小使が下足番をしてゐる。檜山の帽子マントーは下足番が持つて來て吳れた。それを身に附けると彼は急いで外へ出た。

九月になつたばかりである。午後の日は明るくそしてどことなく暖かい、がその中から澄ん

だ冷氣が動き出してゐるやうな氣候である。

街！　街はプロレタリアトの街らしい、有閑らしく散歩してゐる人、そう云ふ人達の生活のために經營されてゐる設定物は何もない。

働くところ、喰ふところ、寢るところ、そう云ふ生活のプリンシパールなものだけが活動してゐる街の生活……その中を急いで彼は行つた。

トベルスカヤの通りは兩側に人の群があふれてゐる。その街のうちにある大きな建物、そこへ彼は入いつた。彼には別に許可證も要求しない。彼は自分の家へ入るような氣持ちで階段を昇り大きな廊下を歩いて行つた。

「まあ掛けたまへ、僕も今すむから……」

主人の北山は机に向き直りふたたびタイプライターを打ち初めた。いつもと變りない、元氣の彼の姿が檜山に取つては心强かつた。

檜山はいづれもロシア製の粗末なレンコート、鳥打帽を脱いで、入口のところに積み重ねてあるトランクの上に置いた。そして、彼は急いで來たため汗ばんでゐた額をその袖で拭きながら、ポルトフォイを右の手に抱いて二三歩部屋の中央へ向つて進み、壁際のソファの上に腰を下した。彼はすぐ近くの机の上に積み重ねられてある日本の新聞を見出した。

興味を引かれたので默つたまゝでそれを手にして讀み初めた。

「ガタ、ガタ、ガタ、ガタ……ダ……」

ある時は早くまたある時はおそく、北山の打つタイプライターは働いてゐる。

この部屋は大きくないが、明るくて整つてゐるので生活とのハルモニーがある親しみを與へる。彼は自分の部屋のように打ちつくろつた心持ちで座つてゐる。

廊下を同じリズムで歩んでゐた足音が停つた。やがて大きな扉が少し開いた。その間から入いつて來たものはまだ若い日本の女性である。あつい黑髪は斷髪に、青いトルコダージを着、黑いサージのスカートを短かく絹の肉色をした靴下に黑い短靴をはいてゐる。

彼女は何處かへ買物にでも行つて來たのであらう。勝手の代りに兼用されてゐる入口の近くにある洗面所の傍で何かしてゐるやうであつたが、ふと立ち上ると檜山の前の椅子に腰かけた。

「君！　その後どうです、君の本をレーニングラードで拜見したよ、表紙の巴と來たらとても

グロテスクだね！　あゝそうだ、そうだ、君は結婚したんだつてね……本當でしよう、だからそんなに落ちついてゐるでしよう……ホ、ホ、、、だつて中野から聞いたんだもの……ホ、、ホホ、、えい、どうです、白狀しなさい！」

彼等はしばらく目で會つた、けれ共舊い習慣を知らない彼女は挨拶の代りにまづ冷かし口を初めた。

檜山は、彼の前に惡戲小僧のやうな格好をして座つてゐる彼女を興味深く眺めた。

彼女は日本で大學と同じ程度の學校を卒業してゐる。そして年ももう一人前の女として申分のない女である。しかしそう云ふ型は彼女の何處にもあてはまらない。

「あなたは、では學院で何をしたんです？」

と、問へば罪のない顏をして苦笑してゐるだけである。そして好きな配遇者を探し出して生活を豐富に有利に轉換しやうと云ふやうな意圖も持つてゐない。

彼女は過去に對して別に愛惜を持つてゐないやうであつた。彼女は專門の敎育を受けてゐるのであつたが、如何なる望みもそれには持つてゐなかつた。彼女の父はソヴエト・ロシアにおいて、偉大な名聲を持つてゐたが、彼女はそれについても、別な便宜を得やうとは考へてゐなかつた。

彼女は自分の新らしい生活に出發するため、父の家を去りレーニングラドの工場へ一勞働者となつて行つた。そしてそこでもう永らく働いてゐる。

全く未知の人達の中に入いつて、若い異國の娘が勞働するのは樂しい時ばかり續くものではない。しかし彼女は苦情を云はない、純プロレタリア出である。と云つて素性を威張つて小理窟を云ふ女などはよくあるが、彼女は默つて働いてゐる。これは誰れも出來る藝當ではない。

檜山は種々の方面から彼女を知つてゐるので良い意味での好意を持つてゐる一人である。

「部屋を貰ひましたよ！　今度レーニングラドへ遊びに來れば泊めてあげるは！　その代り床の上へ寢るんだよ、ホツ、ホツ……」

彼女は元氣よく若々しい聲で話し掛けた。足を上下に組んだりまた開かしたり彼女は無邪氣な話しを續けて行く。

「中村には會はない、おれも行かなきや、奴の方でも來ない！　だつて喧嘩したのよ！　あの

野郎おれのことをお多福だなんて云ふのですもの！　ですから、おれも敗けてはゐない、たわけ野郎つて言つてやつたわ！　そしたら、怒つた、怒つた！　ホツホツホ……ね、この間中野が友達の家へ遊びに行つて飲んだつて隨分ひどく醉ッ拂ふまで、その事を黨へ密告されてしかられたんですつて、いゝ氣味だ！　ホツ、ホ、、、、」

小供みたいな彼女の惡口に、そして獨りで嬉し想に笑つてゐる彼女に釣りこまれて、檜山は別な意味で憤き出した。

北山は何時の間にか仕事を終へ北の窓際に立つて働いてゐる。食卓に茶器の當る音がしてゐる、多分茶の用意をしてゐるのであらう……、

「お前今夜、あれのところへ行くだらう！　もうどうだ、何なら」

父の言葉に促がされたやうに日本女性のレナは立ち上つた。そして眞面目な顏をして外出の用意をすると、部屋から姿を消してしまつた。

「君の方はどうだい、コンアカデーの方さ……」

皿やコップを列べながらも北山は檜山の方を時々かへり見ながら話しかける。豐な黑髪、若

若しい聲、彼の總入齒を知らないものは、彼を七十を越した老人とは決して思はない。

「えい、お蔭で今のところは良く行つてゐます。資格委員會、論文の方も通過しましたから月末にある口頭試問さへどうにかなれば……」

「そうか！　それはまあいゝ！　君は段々と進んで行くから……然し勝つて兜の紐をしめよ、とはほんとうだからね……油斷をしてはいかんよ、あそこはいゝ俸給を出すだらう、そうなつたら今の大學の教師なんか廢してしまつて研究するんだね、ロシアの黨員だつてあすこまで行ける者は極めて少ないよ、事によると僕のあれが少しはきいたか知れんなエイ、どうだい……ハツハツハ……」

北山の話しは悠長で明白である。

檜山は平凡であるにしろ老北山の言葉を、

「エイ、エイ」と云つて聞いてゐた。

「僕の自叙傳の方はどうだい、うまく行つているかい！」

「えゝ僕の手元にあつた原稿は全部訂正してオホチンスカヤの方へ廻してあります。明日また

僕は彼女のところへ行きますよ」

北山は眞面目に檜山の方へ向き直り、

「君、本氣になつて彼女を鞭達してくれなくちや駄目だよ……彼女にしても雜誌の方からも本屋の方からも飜譯料が取れるから、もう少し身になつてやればいゝが、亭主とふさけてばかり居るのか彼女は！　早くやれ！　と僕が云つたと傳へて呉れ給へ！」

「えい、大丈夫ですよ、今度はやつてゐますよ。しかしあなたの方でも隨分根氣と云ふか氣永と云ふか知りませんが、永々と……」

「あゝ僕も今度は休暇を利用して、あれだけはかたづけやうと決心した。そうだ、もう契約してから二年近くなるね、だからこの間出版所の方から催促されたよ、ハツハハツハ」

書く人、修正する人、飜譯する人、それ等の人のだれかが故障を起し彼の自叙傳の仕事は仲仲はかどらなかつた。今では當の北山自身ももてあました、と言ふ風に頭をかいて苦笑した。

北山の自叙傳は、彼が滿七十歳を祝賀した時にコンミンテルンの方から國立出版所を通して出版を契約せしめたものであつたが、既に一年半以上もずる〳〵べつたりに延びてしまつてゐた。ところが雜誌「オクチャーブル」の編輯者から檜山を通じて北山の自叙傳の掲載を申込んだので、仕事は刺戟されて規則的に進行するやうになつた。

「檜山さん、あたしよわつてしまつたわ、活字になつた本でしたらどうにかこうにか譯すと言ふ手段もあるでしやうが、こう云ふ原稿では讀めもしないわ、判りもしないわ！　あゝ」

難解な原稿から直接な露譯は、ロシア人のオホチンスカヤを歎息さしたり、不平をこぼさしたが、皆の者が本氣に仕事をやり出すと彼女は一番先きに喜んだ。

「あなたにもお金を少しあげるわ。……この仕事が濟んだらクレームへでも行こうかしら！」

彼女はそんな事を言つて次に働く日を待つてゐた。

(2) 新來者

——チリン、チリン——

と、呼鈴が鳴つた。北山は席を立つて電話の方へ歩み寄つた。

「ハア、ハア」

彼は電話を切つて元の席へつくと、

「君に話しておいた、例の人が今來るよ」

と、言ひながら左の手首に卷いてゐる自分の腕時計を見た。

檜山は心持ちだけにしろ、自分の姿勢を整へ、勞働新聞の編輯部で働き、さらに伯林にあつて一年近く活動した、と云ふ一同志の彼等の前に現れるのを待つた。

北山から初めて紹介された青年の名は根津と言つた。彼は二十七歳になると言ふが色が白く中背で細つてゐる。そのため彼の體質はその年齢を實際より二つ三つ若く見せる。

「君達……夕飯はどうです、え、濟んだですか、そんなら、茶を飲み給へ、何もないけれども……」

老いた北山は自分で用意した日本の茶を彼等にすゝめた。

九月初めの屋外は全く暮れてしまつてゐる。彼等の集つてゐる部屋の中には天井の大きな電燈と机上ランプとが明るい光を放つてゐる。

無髯の日本人は三人朋座して澁辛い茶をすゝりながら、組織や知人の生活を通じて彼等の會話をつぎ合せながら、前へ戻つたり横へ入いつたりして平凡の茶話を續けてゐた。「無地階の家の構造によつては我々の運動をするには全く不適切なのがある。ロシアなどではそう云ふ點において惠まれてゐた。例へばすぐこの先きの建物の地下室には秘密の印刷所があつたが、誰れも知らなかつた」

と、言ふ者があれば、

「否そうとは限らない」

と、主張するものもあつた。

彼等の話しは伯林の方へ轉じて行つた。根津の話しによると、「伯林のグループはまだまだ活動してゐる筈であるのにその活動の出來ないのは眞面目にならないからだ」

と、言ふ結論になる。

「あゝ云ふ諸君が一緒になつて連絡でも」

と、北山が言ひかけた時にドアをノックした者があつた。

「やあ！」

と、緊張した態度で入いつて來た田山の聲は別に變りはないが痩せこけた、その顏には異樣な凄味のある眼が光つてゐた。

田山は日本における舊い勞働組合の關係者でロシアへは二度も來たことがあり、レーニンとも語つたことがある、と言ふ歷史的の人物である。彼はもうモスコーへ來てから三年近くになる。輕快で明敏である彼は膽力も据つてゐる。大きい口、それは彼が組織者であるよりは宣傳者であつた、と言ふ過去の經歷を語つてゐるやうである。

現在の彼はプロフインテルンの東方部で働いてる。そして共產大學の學生なども指導してゐる、重要な働き手である。

田山は左のポケットからロシア葉卷のうちで最上の部に屬するルックスを取り出して、根津にすゝめ自分でも輕く金齒にくわへてマッチをすつた。

「ハツハ……なる程、それから、彼はその時何處に住んでゐました？　そうか、そうか……」

根津君から大體のビオグラヒイと、どう言ふ目的でモスコーへ來たか？　などの問題をきいてしまふと、田山は改まつた樣子をしながら左翼の組織について根津にきゝ初めた。

煙草の煙を大きく吐きながら考へ〳〵問題を系統づけて行こうとしてゐる田山、それに對して根津は精力的な冒險的な過去の生活を詳しく說明して答へてゐる。

田山と根津、彼等二人は只その口と耳だけではない、全ての機關、組織を動員して、と言ふやうに、お互に表情の變化、さらに內部における思想の容態まで探し出し見拔こうと努力してゐるやうな神經の機敏な活動があつた。

試す者と試される者と彼等二人の會話と行動、それを北山も檜山も注意深く聞いてゐた。

「そうすると君なんか仲々偉い人だつたなあ、だから僕なんかとう〳〵向ふにゐるうちにお目にかゝれなかつたわけだ」

一時的に質問を終へてしまつた田山はこんな皮肉を言つた。皆の者は輕く笑つてゐた。

田山は豪膽らしくまた細心に雜談を延して自から主人公になつてゐる。

アルミニユームの茶器をさげて湯を汲みに行つてゐた北山が部屋へ歸つて來た。そしてさらに茶の準備をした。

話の調子を見切つた檜山は少し眞面目になつた。そして、

「では僕は北山氏に代つて質問をしますから」

と、冒頭して根津に對する第二の試問を初めた。

純粋な經濟學の理論、政治問題、あるひは勞働運動の最近の歴史等が種々の例題と關聯して提出される。

「僕はそれはまだ知りません」「それもまだ明確には答へられません」

根津は不名譽ではあるが致し方がないと言ふやうに答へて行つた。

「君の專門に研究した問題は何ですか？」

檜山と根津は獨逸における勞働組合について應答してゐたが、ついに論戰のやうになつてしまつた。田山は苦笑しながら彼の見解を押し入れたり、二人がまた元へ戻つて正しい論旨を進めるやうに骨を折つた。

北山は默つて聞いてゐる。しかしその顏は異常に緊張してゐた。

クレムリンの時計が夜の十二時を打つたのであらう、隣の部屋のラヂオはインテルナショナールの合唱を傳へてゐる。

雜談が一と切となつたので、部屋は靜になつた。田山は日本製のニツケルの腕時計を見た。それを機會にまづ根津が立つて、

「おそくなりましたから」

と言ひながら、さらに田山に向つて次の面會日の時と場所を打ち合してゐる。彼等二人は部屋から出て行つた。少したつと田山は戻つて來て、檜山を廊下まで呼び出した。

「君どちらが先にこの部屋へ入いつてゐた？」

「僕が先きに」

「彼をどう思ふね君！」

田山は重大事らしくたづねた。

「さあ？」

檜山は田山の險しい顏色を眺めたが、決定的には答へなかつた。

田山は廊下を下つて彼の部屋へ下りて行つた。

檜山は再び北山の部屋へ戻つて來た。二人は氣輕な態度になつて、伯林にゐる國井に向つて

發送すべき書籍の選擇について打ち合した。ロシアに於て外國へ發送するに一番郡合の良い物は書籍である。第一價格が安く、第二には政治的な疑問を受けない。で彼等二人は一ケ月に二十ルーブル宛出し合つてソヴエトの書籍を伯林へ送付する。伯林にゐる國井は上海にゐる書籍商に取り次いで幾らかを得ることが出來る。そうすれば困つてゐる彼の生活をいくらかでも補助出來るから、それがこの事業の共同の目的であつた。

檜山は北山から二冊の雜誌を借り、彼から貰つたバタとともに鞄に入れた。そして彼の部屋を出た。

トベルスカヤの通りは夜の女を中心として人の往來がまた盛である。

赤い家と記念塔の立つてゐるモス・ソヴエトの廣場を前へ下ると、スペトナヤ・ブルヴール（花の街）に出た。十字街頭に立つて乘合自動車を待つた。然し時間が遲いので來なかつた。

檜山は平らな廣い街を大劇場の廣場まで歩んだ。

ほとんど乘客のない深夜の電車が恐ろしい速度でやつて來た。彼はそれに乘つた、そしてその日の新聞を讀みながら自分の家に近づくのを待つた。

（3）別れ

第五回プロフインテルン世界大會、第十六回ロシア共產黨大會を終へた北山は四十日程の休暇を貰つてクレミヤへ保養に向ふ事になつた。

社會運動家としての北山は世界的の名士であるが、個人的生活の上に於いては一のプロレタリアートである。トボルヌカヤ街のルクスの二階の一室は彼の起臥のために支障はないかも知れない。然し部屋だけでは生活は出來ない。下女のない彼は食事のために自から激務ををへて勞働した。秘書のない彼は自から書を求めそれをあさり、自から執筆し、それを抱へて出る。それから若い同志達も何かについて彼の盡力を求めに來る。其は只日本だけではない。朝鮮、支那、印度、アメリカ、メキシコ等々、これを除いて彼の公人として義務、勞働は若い鬪士の二倍も果さなくてはならない。コンミンテルン常任委員、執行委員、モーブル次席代表等々。

七十歳の老鬪士北山！　心臟病者の彼が超階級的に人を感服せしめるものは只その精力的な行動だけではなかつた。それは彼が半世期間に亘つて粒々刻苦のうちに修得し練磨したところ

の「人格の力」であつた。

日本の、ある舊い作者の一人は「世界のうちで師事してみようとする人は北山だけだ」と云つたさうだ。それは兎に角、檜山に取つて北山は人として又同志として信頼の出來得る人であつた。檜山はもう三十近くなつたが、北山のやうに打ち明けて相談の出來得る人、同志は初めてであつた。

「冬雜木林に入つて薪を伐る」それから炭を燒き雪の山路を牛を引いて歸る少年――。兄の田を耕し畑を打つ青年、彼は友達の家へは客として行つたが、自分では友達を客としてよぶ事が出來なかつた。印刷職工、コツク、早稲田大學の先生を二ヶ月しか出來なかつた彼！　彼北山の今日の存在は日本の農民の勞働者の生産である。

「僕は子供の頃から牛と共に草を刈り田を耕し、稻を債み薪を運んだ。彼に對して愛着を感じ、その肉を喰ふ氣にはどうしてもなれなかつた」

「父は故あつて出家し」とかさらに「彼は下級の巡査であつたが親友のやうに交際した」と、反宗教運動を命がけでやつてゐるソヴエト・ロシア、舊國家に働いた者は崇拜しないロシアに於いて北山だけは赤裸にその過去を公表して平然としてゐる。この自然人北山は多くの群山を拔きいでて立つアルプスの峰の如く雄大であつた。從つて多くの人々から尊敬された。檜山もその一人であつた。

北山のクレームに立つ日、檜山は彼から招かれ、出發の用意を手傳つた。其の日は彼等の外に北山を世話してくれる看護婦のオージノビツチも來てゐた。

衣服、毛布、その他の日常品をつめ込んだ中位の旅行鞄、旅中の食事をつめた舊式な四角な手提げ鞄、僅かの書籍、新聞雜誌等を入れたボオルトフオイ、裏返しでもしたらしい清楚な夏服、ロシア製のズツクの夏靴、保養に行く北山の準備はすでに出來てしまつた。

机、本箱、椅子、寢臺、戸棚、食器等が整頓され、留守にならうとする部屋を守つてゐる。

「まあ御苦勞であつた。何もないが晝飯でも一所に喰べやうではないか」

主人の北山と共に三人の者が旅に立つ別れの食卓についた。第一には北山がロシア式に料理した鷄のスープであつた。第二には海草や茸の入いつた日本の五目飯であつた。それから果物も出された。珍らしいので主人も客もよく喰べた。

「これが僕の行くところだから」

と北山は彼のアドレスを半紙に書いて「日本に於ける金融資本の體系」と云ふ本と共に檜山に渡した。其の頃檜山は日本帝國主義と云ふ本を書き初めてゐたので、幾度も禮を云つてその本を借りた。

「それから根津君に會つたかい？」

茶をすゝめながら北山はたづねた。

「エエ一度會つただけですが？」

「あの男は日本で活動したんだよ。可愛想に肺病にやられてゐる上に金もないし、ロシア語も判らないから君のやうな幸福な位置にゐるものは見てやらなくちや……エイ！　僕は田山にもよく依頼しておいたし、又プロフインテルンの書記のヤヨンソンにも彼の紹介狀を書いた。英語も出來るし獨逸語も出來るし僕はレーニン・クルスへでも入れたらいゝと思ふがね……兎に角僕が居ないのだから君は僕に代つて世話してやつて呉れ給へ、そして手紙と一緒にあの君の消息も詳しく通知して呉れ給へ……證據もないのに人を疑つて怖れてゐるなんてそんな膽つ玉の小さい事で何が出來るもんか、そうぢやないか……君……今はもう少し進歩的に考へる時機ぢやないか、來る者は追ずぢやないかね……味方に來る者はどん〳〵と味方にして陣を張らなくちや戰は出來やせんがね……金のないのに高いホテルにゐるのも不經濟な話しだから、君でも骨を折つて何とか世話をしてやらなくちや、君……そんな位の事は出來るだらうね」

北山の言葉には眞情が溢れてゐるやうである。

「それは判つてゐますが、あなたが居なければ田山の意見も尊重しなければならないし」

「そうだ、だから君は田山のところへも行つて相談してね、盡力してやつて呉れ給へ。味方は一人でも大切にしなくてはね、それからレーニングラードの中野にしてもさうだ、無刺戟のあんな處に一人でぽかんとしてゐるから何時までたつても者になりやしない、學校へ入りたいなれば何處へでも世話して入れてやるから是非モスコーへ來い！　と、云つてやり給へ。中野は口がないと思つて心配してゐるかも知れないが若し君大學院に入學出來たなら、あの學校の教師などは廢めてその後へ中野を推薦したつていゝだらう？　君の仕事はあれでは出來ないだらうか？　兎に角、僕の名前で君から彼にモスコーへ出て來ると云ふ事を呉れ呉れも云つてやり

給へ。僕も休暇後は健康を大いに回復して來る積りだから、そしたら皆集つて大いに發奮しうんと勉强しやうではないか？」

眞面目な人事問題を話してゐた北山の言葉が終には政治的な宣傳に入いつて行つてしまつたので、今まで、エイ、エイ、と聽いてゐた檜山は元氣づいて、

「そうしましよう！」

と勢ひに捲きこまれて追隨してしまつた。

「どうだい、僕は年はいゝが仲々元氣だらう」

云つた北山も聽いてゐた檜山も子供のやうに他意なく笑つた。

「何を話して笑ふんです、あたしには日本語はさつぱり判りませんよ、ホツホツホ……」

食事の後をすつかり取かたづけてしまつたオージノビツチも彼等の方へ近寄つて來て笑ひの中へ仲間入した。

時間が來た。一人の女、二人の男、三人の者は荷物を持つて階下へ下りた。ルクスの前にはもう自動車が彼等を待つてゐた。新らしい機械だ。

「ロシヤで出來たのかい？」

檜山が物好きにたづねると、

「戯談ぢやない、輸入品だよ、アメリカからの」

人の好ささうな運轉手は笑ふ。

トベルスカヤーの大通りを自動車は除行して行く。

「アヽアレが北山です、有名な！」

と云ひながら街頭の群集は自動車の上の彼等を懐しさうにあるひは羨し相に眺めてゐる。菩提樹、白樺の繁つてゐる大通りには大型乘車物も人も極めて稀である。ボー、ボー、とラッパを鳴らしながら彼等を乘せた自動車は急速力で走つて行く。破壞してゐるところ、新築してゐるところ、增築、修繕、建設の途上にあるモスコー市の一斷面が次から次へと廻轉して行く。

彼等はクルスキー停車場の前で自動車を下りた。

クレミヤ半島行きの列車は此處から發車するのである。

勞働者、農民、赤軍の兵卒、將校、學生、婦人、子供あらゆる階級、職業の人間、笑ふ者、

呼ぶ者、泣く者、相闘ふ者、抱擁する者、ロシアらしい不潔な停車場は過渡期にあるこの國の縮圖であらう！

檜山は停車場の賣店から其の日のアガネオクと、イスベスチヤとを買つて北山に渡した。

雜踏から雜踏の中を押し分けて三人はやうやくにしてクレミヤ行のプラットホームに出た。列車はもう構内に横はつてゐた。

「まだ時間があるから話して行き給へ」

荷物も運び込み、席も決つて一安心した北山は親しげにそう云つて二人の者の足を止めた。

「えゝ君！　今云つた事を忘れないで責任を持つてやらなくちやいけないよ」

オホチンスカヤーを鞭韃して彼の自傳の露譯を急ぐ事、根津に對する注意とか世話とか伯林にゐる國井、レーニングラードに居る中野、さらに北山に向つての規則的の通信、報告、檜山自身の生活に對する注意事項に至るまで北山は呉々も檜山に云ひ聽かした。

長い列車は南に向つて滑つて行く。秒一秒と遠くなり小さくなつて行く。今ではもう響きも絶へ形も見えなくなつてしまつた。その後に殘つた黑煙が長蛇のやうに中空にうねつてゐる。

今居た老同志はもう居なくなつてしまつた。檜山は何となく淋しさを感じた。

「あなた淋しくなつたの」

オージノビツチは檜山の肩を輕くたゝいて顏を眺めた。

「三晩も寢なかつたもんだから頭がぼんやりするやうになつてしまつた、然し何ともありませんん」

檜山はその云ひ譯けが極めてまづかつたのでわざと頸とも頭とも分らぬところを二三度撫でてゴマかした。

「北山はジナの事もあたしの事も言はなかつた！」

三十を越してるけれ共若造りのせいか、づつと若く見へる彼女は、心持ハニカンで尋ねた。

「エイ何にも」

と答へると、

「北山は子供や妻に無頓着な人か知ら？」

「そんな事があるもんですか、口に出さないだけですよ。人一倍考へてゐるでしよう、そこは

東洋人ですからね」

輕く受けてうなづいた彼女は、

「あなたも、そすと東洋人ですか？」

と檜山をひやかして笑ひながら、

「あゝ忘れてゐたジナからあなたに手紙がある」

と、乘合自動車に搖られる身體を檜山の方へ傾けて支へながらハンド・バックから手紙を取り出して檜山の手へ渡した。

「有難う！　と云ひなさい、若い婦人からの手紙をあげるんですもの……よ」

と言つた聲が少し大きかつたので彼女も檜山も、又彼等の近くに腰掛けてゐた婦人達も吹き出した。

檜山と彼女とはサドハ・トリオンハールの近くで乘合自動車を降りた。そして彼は彼女をある大きな病院の近くにある彼の女の家まで送つて行つた。

（4）秋の夜

彼は其處からブラブダ紙の前を通り、プシキンの銅像を右に並樹の枝の重ね交けて繁る大通を直進してアルバイタに出、ゴーゲルの像を通過して大通の中にあるレストランへ入つて夕食を取つた。其處は少し高價であるが時間の制限がないのと順番もなく客種もいゝのでいはゆるなじみの店である。ある時散歩のつひでに北山をも其處へ招いた事があつた。

1　渺々とした陸と海
　　幾千里、また幾千里
　　東の
　　空の上にも光りはおなじ
　　この夜の月と星。

2　住む人も絶へて
　　廢れたる
　　わが家の庭に
　　こ年もまた愛らしき
　　紫の山葡萄。

3　より新らしく
　　生きる戰ひのために
　　家を、友を、故郷をすてて
　　秋
　　異郷にさまよう。

その夜の空は晴れてゐる。澄んだ月が高くかがやいてゐる。人の居ないテラスの隅で檜山はつまらない句を幾度となく書いてみた。そして讀み返した。自分のものでひゐき眼に見ても詩想は古く貧弱である。さらに詩形にいたつては新らしい時代の、新らしい階級的な藝術觀などは少しもない。舊い社會の舊い人の持つてゐる心持ちを書き並べることしか出來なかつた。詩にも興味もあり感興も持つ、しかしベルチフイカシオン（詩工）の技術に至つては自分などはどうしても出來ない藝當である、と、思つた。彼は紙きれを握りつぶしてしまつた。しかしふと、何か云ふことが出來ただらうか？　と、思ひ直すと捨てるのをやめた。そしてしわくちやを直し又讀み初めた。

氣がつくと彼の前にある茶は何時の間にか冷めてしまつてゐる。頰を肩にあてると濕つぽい、夜露が下りたのであらう。彼は急いで往來へ出た。

「あゝあなたは支那の藝人ですか！　そしてその歌は何に？」

かう云つて反對の側を歩るいてゐた十八九の娘は檜山の前から抱きついた。

彼の周圍には澤山の人々が立ち止りこの光景を眺めてゐる。檜山は何が何だか自我を失つてしまつた。

「あたしは此の人を敬愛するね！」

が學生であらうか、事務員であらうかと思はれる服裝のこの娘は、大膽に彼女の慾する事を行ひ、云ひたい事を云ふと他人には關らず急いでぐん〳〵と行つてしまつた。ようやく我に返つた檜山には淡いゆかしい彼女の髪の毛の香ひ、肉付のいゝ腕、胸から受けたところの體溫と生き生きとして彼の生命の內部へ向つて進擊して行くのを感じた。

彼の今迄押へ隱してゐたある神經は擾亂された。

彼は念佛のやうな節で歌つただらうと思はれる句を往來へたゝき捨て、

「あゝ孤獨から孤獨！　此の自己をあざむく形式から受ける淋しさ！　おれは今あの娘のように自由になりたい」と。

自分自身に囁いた。彼の頭の中には透明で均衡の取れた細面の顏、强い意志と感情を表明する大きい茶褐色の眼、やわらかく浮んだ細い眉、聰明さを思はせる丸みを持つた額とそれを蔽ふ黑色じみた斷髪の娘。全てが美くしい。彼女の姿がまぼろしの樣に幾度となく現れて來た。

そして、

「あなたは若い男ではないか、あなたは何のために生きてゐますか。あたしはあなたを少し知つてます。あなたの夢みてゐる世界からは決してあなたの求めてゐる幸福は出て來ません。現實を憎むではなりません、ちまたにあえぐ人を笑つてはなりません、賤しむではなりません。あなたのやうに明日をのみ夢みて生活するものは今日と云ふ現實に戰ひ得ない弱者の態度です。從つて孤獨に陷ります。若しあなたのように一人の處女の存在は大きな意義を持つてゐない、と云ふ考を持つてゐる人があればそれは誤りです。生きた女の持つ肉體美！　あなたはそれが判りますか？　いゝえ判らないでしよう。それがほんとうです。あなたはいつも遠いところへ行こう行こうとしてあせつてゐます。それは馬鹿げた徒勞です。近いところから、賤しいところから、きたないところから、あなたの生きるべきものを探しなさい！　そこからあのたは人としての幸福を發見するでしよう。然しあなたはそれを摑る勇氣がありますか、否、ないでしよう。どうです、今あなたはあたしに抱きつかれた時に、あたしをどうすることも出來なくて逃してしまつたでしよう。あゝひきような、僞を持つ男！　あなたはそのドグマを捨てない限り、決して人生を知る事が出來ません。ですからあなたの生活を意義づけることが出來ないでしよう」

と云ふやうであつた。

檜山はいつのうちにかモスコー河岸に面した自分の家に歸つてゐた。机の上にはその日の朝讀んでゐた維新史が擴げられてゐる。維新を如何に解釋すべきか？　と云ふ彼に課せられてゐた仕事はその夜も手につけられなかつた。

「かう云ふ問題はいくら考へてもおれには判らない。おれには生活もその意義もどうでもいゝ。只呼吸が出來、動いてゐれば生きてゐると思ふだけだ。只それでいゝ。俺は自分の無能の事を知つてゐるから」

檜山はベットの上へ仰けに倒れた。

（5）隣の娘

彼はふと目を開いた。窓ガラスを覆ふたカーテンを透して強い日の光が室内へさし込んでゐる。遠くを通る電車、大型の荷物自動車の音が響く。暫くするとコツ、コツ、と戸をたゝいてゐる。

「あゝ誰れか來てゐる」

彼は寢まきの儘で急いで起き上り、扉を開けた。

「おゝ君！　寢たのか」

金君が訪ねて來たのであつた。彼は朝鮮生で身體が大きいが稀れに見る好男子である。然し彼の使ふ日本語の單語やアクサンが妙なばかりでなく、時の用法が滑稽極まるので檜山は時々憤き出す事があつた。

金君は檜山と同年である。彼は釜山に生れ、日本の將校に愛せられ、幼年學校へ入學し軍人にならうと隨分苦心したさうだが、どうしても成功しなかつたと云ふ。それから滿洲支那を放浪し、家兄の援助でインフレーション時代の獨逸に行つて勉强したが、學費が思ふようにならないので、入露し勞働してゐたところをある人達の世話によつてプレカノフ大學の經濟學部に入學し、近く卒業するやうになつてゐる。彼と檜山とは親しい友である、彼は裏海の方へ修學旅行に行つてゐたが、つひ最近モスコーへ歸つて來たのだと云つた。

檜山が寢具や衣服を整へたり、部屋の掃除をしてゐるのをみて金君は、

「リパはゐるだらうか？　僕は挨拶して來ようと思ふが？」

と、優しい聲でたづねた。

「行き給へ、今日は多分居るだらうから」

檜山の聲は意味あり氣に笑つてゐる。

リパは檜山の隣の部屋に住んでゐる舊將校の二番娘である。黑色の髪と黃色の皮膚は日本の美くしい娘を思はせるに充分である。一年程前檜山がこの部屋に轉居した時最初に知り合つた娘である。彼女にはタイピストの一人の姉と、妹とさらにその下に十五になる弟とがある。よく肥えてゐる母はまだそんなにでもないが、父親は六十の坂を越し、安い賃錢でモスコー新聞の印刷職工をしてゐる。部屋は二つ持つてゐるけれども家族が多くて收入がそれに反比例するので檜山などに比べると生活は餘程苦しいようである。それでも彼女は度々茶に招んで呉れたり、又不釣合の下着などの加工や修理もして呉れる。從つて檜山は彼女の母に時貸を賴まれたり、時には舊い洋服やワイシャツなどを持つて行つてやつた。彼女とともに彼等の姉弟をシネマに連れて行つた事は隨分澤山ある。それから夏のある夜、モスコー河へボート漕ぎに誘れて行つて、ゴロツキ達から惡く冷かされたり脅かされたりして困つた事もあつた。彼女の得點は日本の娘に似てゐるばかりでなく、利巧で落ちついてゐて無口であつたから、檜山は普通の隣人としてよりは以上の敬意を拂つてゐた。

檜山はある時、彼女に秋草の模樣のついてゐる浴衣と有松の帶とを呉れた。それはオオチンスカヤーが秘密に檜山に贈つた品物であつた。幾年か前である。日本からロシアに左團次一座が興行に來た。その時、オオチンスカヤーは通譯として「とても忙しい」と汗をふき〳〵働いてゐた。一座のうちのある若い人氣俳優がモスコーを去る時にかたみとして彼女に贈つた記念品である。そう云ふエピソードのある品物であるに拘らず檜山はリパの歡心を買ふためにそれを手放した。そればかりではない、レーニングラードから彼女の靴を取り寄せてやつた事もあつた。

そんな事をしてやつた檜山の態度を彼女はどんな風に考へてゐたのか？　親切な男、と云ふ程度に考へてゐたかも知れない、彼女の母がよく戯談のように、

「リパをやりましようか？」

と、檜山に云つた時には、彼女は兩手で顏を隱して如何にも處女らしくハニカンでゐた。檜山はある大學の歷史の敎師をしてゐた。そんな關係で學生達がよく彼の部屋へ出這りした。その中には若い女の學生達もあつた。彼女はそれを決して見逃してはゐなかつた。で、ある時はそんなことから彼女はそろ〳〵檜山を警戒し初めたのではなからうか？　と思はれるような態度が彼女の生活の中に見えた事もあつた。然しそれだけならば未だよかつたが、半年程前檜山は黑海の岸へ保養に立つた。彼は別に氣も留めずに、留守中を統計局に居る獨身の女に監理を兼ねて部屋を貸した。歸つて來て見るとリパは檜山を以前のやうに信賴しなくなつた。他に男のあるらしい姉のゾーヤは檜山の家へ平素のやうに入いつて來て茶を飲んだり戲談も言ふのであるが、リパは決して獨りでは訪ねはしないやうになつてしまつた。

檜山はそれを別に苦痛と感じなかつた、のみか冷靜に彼女の生活を眺めてゐた。そういふ機會に現れたのが金君である。彼は彼女の全てが氣に入つた、と云ふ。

「君怒らないのか？」

「僕はどうもしないよ」

と、檜山は知らん顏を裝つて承諾したが、あの女は利巧だから彼奴も僕の二の舞を踏むかも知れぬ、と、想像した時には獨りでおかしかつた。

「金君どうだつた？」

と、あまり大首尾ではなかつたらしい金君の悄然とした姿が部屋の入口に立つた時、檜山は先手を打つた。

「今日は田舍へ行くからだつて……然し明日の晩はさし支へないと、云つたよ」

檜山と視線をふれないやうに力めてゐる彼の聲には前のやうに感激がない。過去の經驗を持つてゐる檜山は「それ見よ」と腸がよれるやうになつた。然しそれは隱して、

「で君も一緒に田舍へ行くのか？」

としらばくれると、

「僕なんか行くもんか、明日も行かないよ」

と、彼は半分笑ひ半分怒つてゐる、と云ふ調子である。

「君どうしてそんなアツ氣ない事を云ふのだ、最初はえらく期待してゐたくせに！」

「あの女ケチにお嬢さんらしく氣取つて顏をこうしてゐるよ」

と金君は妙なすまし顏を眞似たので二人共笑つてしまつた。

「相手仕事だから、根氣よくやれよ」

と、檜山は彼に茶をすゝめ、彼の體驗した昨夜の顚末を物語つた。と金君はもう氣まづい思ひを打ち忘れたやうに、最近彼がセバストポールからモスコーへ歸る汽車の途中で出來た、エピソードを語り出した。

「彼ともう一人のロシア人の學生とは、遇然レーニングラードの音樂學校の女學生三人連と乘合ひになつた、車中の二日間に大變接近してしまひ、モスコーへ下車した彼女等は、其の夜彼等の寄宿舍へ遊びに行く事まで堅く約束してしまつた、二人の學生等は、シメたと大嬉び、あわてゝ寄宿舍へ歸るとすぐもう一人の仲間を誘ひ部屋の掃除をいつになくやつたり、皆の財布の底をハタいて見ても幾位にもならないので冬着をかり集めて質屋へ交渉に行くもの、酒を買つたり、一羽三十ルーブルもする鷄を二羽も買ひ込んで料理する。あわてゝ床屋へ行く者、鏡を借りて來て顏を作るもの。

——今夜こそ豐年だ、うんと飲もう！——

と、三人がもう婚禮の夜のやうに樂しんで御馳走を準備して彼女等の來るのを待つてゐた。ところが約束の時間が過ぎ、十時になり、十二時になつても未だ來ない、道案內に出て立つてゐた學生も氣を腐らして歸つて來る。それにしてもと彼等は首を長くしてとう〳〵朝まで待つた。處でお互にだまされた、と云ふ腹立ち紛れから喧嘩を初めて、今から考へればおかしくなつてしまふ！　馬鹿も例へようのない馬鹿だつた、ハツハ、ツハツ、、、、」

獨身者達のそんな話も一と切りになつてしまつた。その日は日曜であつた。で外へ出た、別に何處へ行く目的も持たなかつた。然し寢る以外に何の興味も慰安もない彼等の部屋よりも、外、町には彼等の生活に何かの刺激を與へるものがあるだらうと思つたからである。

(6)　街　頭

釣錢のないために一時間以上も待つてゐたが、ようやくにして彼等は文化と休養の公園に入いつた。

この公園は巴里のルクサンブルグのやうに整然とした古典的な人工美と云ふ物は少ない、自然と造化の美日比谷公園と芝公園とを合したやうな處もあるが、それよりもなほ野趣に富み若若しい『文化と休養の公園』名の示すやうに活動、芝居、技藝各種の展覽會、各生産品の賣店茶屋、料理屋、體育上の施設もある。廣場、河、山、谷、林、丘、草地何でもあるが、皆が不完全である、未成である。いかにもソヴエトの公園らしい、此處にはヨーロッパの公園のやうに椅子に腰掛けて半日を暮すやうな哲人も、また詩人も居ない。動いてゐる大衆！　それ自身が個人の姿となつて浮動してゐる。從つて固定的な複雜した形式的な美はない、單一的な形式のない、均衡不均衡、そのまゝを平面的にさらけ出した美である。

二人は晝食のために大衆食堂へ入つた、順番になつてキタンシュを買ふ、順番になつて食品を貰ふ、順番になつて食卓の空くのを待つてゐる。彼等もやう〳〵座につき食にありつく事が出來た。肉類はないすべて鹽魚と野菜である。

「君、あそこにゐる二人の女はどうだ？」檜山は小聲である、金君はそつと盗み見た。

「先刻からおれ達の方を眺めて何とか相談してゐるやうだ」と、檜山は說明する。

「オウ、オウ、飯も終んだのにまだ座つてゐるが」

妙な日本語で金君も興味を持ち出したやうである。

彼等が彼女等の方を向くと、彼女等は眼を反らしてしまふ。彼等が彼女等の方を見ないと又彼女等は彼等の方を見てゐる。そのうちに彼女等席を立つた、そしてそろ〳〵と食堂を出て行く。二人共二十歳前後の事務員らしい美しい女達である、で彼等も又席を立つた。

道は一直線で人も澤山往來してゐなかつた。彼等はあまり遠くない處に彼女等の後姿を探し出した。

「おい道で化粧をするのか鏡を出して見てゐるぜ！」

と、檜山は彼の目指する背の高い桃色のマントーの方を注意した。

「いや、ちがふよ、君あゝして背後に居る俺等の行動を見てゐるんだよ」

金君の眼は仲々えらい、――そうか！　ロシアの娘だと思つて油斷は出來ない、なか〳〵面白い獨創的な藝をやる、と檜山は獨りで思つた。

恥でもない、名譽でもない、勿論おそれもなければ罪も感ぜられなかつた。只自然のまゝに

欲するまゝに、女二人男二人、彼等四人は街上で一所になつた。

「あなたは、何をしてゐるの？」

檜山の桃色のマントーは改まつたやうな態度に返つて彼の風格を見つめながらたづねた。

「働いてゐます、役人です」

と、檜山も彼の女をもう一度見返して答へる。

「何處の？」

「支那大使館」

と檜山は仕方なしに口から出まかせを云つたので彼の女の眸の動きを見る。

「あら嘘を云ふ、あたしあなたを度々見た事があるわ、あなた共産大學かコンミンテルンの……あたし彼處へ行つた事があるわよ」

彼女の言葉に神經をビク！　とした檜山は思はず金君と顔を見合して冷めたく笑つた。

「今あなた方は何處へ行くのです」

先になつてゐた彼女等は後を向いてこう尋ねた。

「僕達はあてがありません。が、シネマへでも……あなた方もよかつたら一所に行きませんか？」

と、檜山は彼女等がどうしても「誘」を拒絶しない樣にと、云ふ意を彼の言葉と眼の中へ無口に現した。

「何處のシネマ？」

彼女、桃色のマントーのこの言葉を聞いて檜山は胸を撫で下ろしたやうであつた。

「こゝだつてかまわないでしよう、座席さへ良ければ、ね君達？」

と、檜山は俺れ達の方はすでに話しがまとまつたが、君達も良いだらう、と金君等の方を振り返つた。

「僕はこの繪はもう見た」

と、金君の返事は少しおかしい、彼の相手の女も彼との間にはそれとなく空間を作つて立つてゐる、何とも答へない。

「君そんな事を云ふな二度だつてかまわないではないか」

と日本語で云ふ。

「どうです、こゝが氣に入らなければ、ストラスノへでも行きましようよ、あなた方の御意見は？」

と、女達を勸誘する檜山の態度は熱心である。

言葉といひ又態度といひ金君とその女との間の感情の連絡、交渉は段々冷却して行つたやうだ。金君に云はせると、彼女達の服裝はロシア娘としては非常に立派だし、その住所は外國の大使館街に近い、特にわれ等を共産大學とかコンミンテルンと目指したのは事によると、何處からの手先ではないか知らん？　であるから彼は本氣になれない、と。なる程理由はある。然し檜山の桃色のマントーは圖抜けた美人で、金君の方は平凡な娘と云ふ事も爭はれない、金君は檜山の專斷振りを憤慨してあんなジヤマをするのかも知れない、然し今更取り替へする事も出來ない話である。

「君、僕はこゝで、何でも支拂ふ君の欲するものを、どうかそんな苦情は言はないでくれ！」

と、云ふやうな文句で檜山に口說かれた、金君はとう〳〵自說を泣き寢入りにしてしまひ大勢順應と云ふ日和見主義の態度に變じたが、今度は彼の同伴者たる可き平凡娘の方でジレて來た「身體の具合が惡るいからこの儘家へ歸りたい」と言ひ出した。金君から好かれてゐないと感じ取つた彼女の立場としては無理のない話である。檜山は失望して彼の友となつた桃色マントーの顏を見た、彼女の方は檜山を見ようとはしないで美くしい顏を地に伏して無言である。

「總ての情勢が仕方がない」と云ふ結論を表明してゐる、ヤキモキするものは、檜山一人である。で、彼は總てをその肩から下してしまつた、そして次に會ふべき機會を約して彼女等と別れてしまつた。

「モスコーから敗退するナポレオンみたいに淋しいね」

檜山には淋しく又名殘惜しかつたのを表明した。

「仕方あるものか！」

と、金君の答へは大陸人らしく悠長にしてゐたが、檜山には同情してゐるらしかつた。

彼は最近溺死した同鄕人の妻君を訪ねようと思ふから、と云つて檜山とは別な行動を取るやうになつた。獨りになつた檜山は氣輕さを感じホツト一息した、腕時計を見るとまだ早い。

（7）客舎の友

「そうだ彼を訪ねてやらう」彼は獨り首肯いて三十三番の電車に飛び乘つた。

ドベルスカヤの中央郵便局の近くにパーサージと云ふホテルがある。伯林から來た根津は其處に滯在してゐる、彼の部屋は暗くてあまりよくないが、同居人がフィンランドの勞働組合から派遣されて來た人でドイツ語が出來るから、根津に取つては部屋代は半額で其の上露語の通譯をして貰へるから願つたり叶つたりだ、と云ふ滯在部屋である。

「君を實は待つてゐたよ、住所を知らないので閉口した」

と、云つて根津はホテルの事務室から出て來て檜山と握手した。彼のホテルには露語の判らない支那人がゐる。彼は然し英語が判るので根津を呼びだし（英語を）根津に獨譯させ、獨語の少し話せるユダヤの會計係が露語に直して宿の事務員と支那人との交渉を手傳ふさうである。

「恐ろしい念入の通譯だ、時によると一日に三回もやられる」と、根津はコボしてゐた。

檜山は一キログラム程買つて來た林檎を皮鞄から取り出して机の上に並べ、

「北山も君の事を心配して、どうだ、どうだ、と書いてよこすよ」

と、冒頭にし、老北山の最近の消息を根津に云ひ傳へた。

昨夜ゲノーセン田山が此處へ來たが、學校の事についても、仕事の事についても、具體的には何とも答へなかつた、只僕の樣子を見に來た樣な風だつた。

と、根津はかじりさして居る林檎を机の上に置き、

「これが獨逸語のビオグラヒイさ、やつと書くにや書いたが、人の前へは出せるもんぢやない……それに『過少評價』と云ふドイツ語を知らなくてひどい目に會つた」

根津はさらに荷物の中をあさつて、日本において發行されたと云ふ謄寫版ずりの勞働新聞パンフレットなどを見せた。檜山はそれ等にはあまり關心を持たないやうに机の上へ伏せ、

「君それではプロフインテルンのヤンソンシンに未だ會はないでしようね？　僕は矢張り田山の回答を確定づけてしまつた後に會見した方が好いと思ふがね、それからこのビオグラヒイの訂正なら僕は世話しますよ」

根津は檜山の意見と同しであると述べた、然しビオグラヒイは同居のフインランド人に賴もうと云つた。

二人の會話が一時絶へた時、部屋の内が急に明るくなつた、と思つた。然しそれは電球に變化があつたのではなくて屋外が暗くなつてゐたためであつた。

「食堂へ行つて飯でも食べながら話さう」

二人のものは部屋を閉め、長い廊下のつき當りにあるホテルの食堂へ歩いて行つた。

此處の食堂もまた滿員である、滯在客以外の客が食事だけに來るためであらう。二人はしばらく入口に立つて待つてゐたが窓際に空席が出來たので其處をす早く占領した。

食事中の二人は日本語の會話を聞いた。で、ビクとして思はずその方を見た。モスコーへ來てゐると云ふ作家の若い女性が二人ゐた。一人は丸顔で眼鏡をかけてゐる。他は色の淺黑い血色のいゝ顔である。そうだ！　そう云へば女史等はこのホテルに滯在してゐるのである。何時でも二人連で暮してゐる。この日本の婦人の話はモスコーでも有名で檜山のやうな社交の狹い者までも度々噂を聞いたのであつた。

根津は伯林でプロ藝をやつてゐる百田からこの女史に宛てた傳言を持つてゐる、がどうしやうか？　と檜山にたづねた。彼は今の所は見合せるやうに、と云つた。

赤色のモスコー、此處に於ては日本人は×と白に區別されてゐる、で×日本人は決して普通の日本人に接觸、視線の接觸さへしても不可能の事になされてゐる。從つて萬里を離れた異鄕でまれに會ふ同國人にさへ非合法の日本人は怖れをいだいてゐる。

その晩根津はモスコーへ來てもう二週間にもなるが、露語が不自由なのと地理に盲目であるため、停車場に置いて來た荷物を取つて來る事が出來ない。その次には殘り多くない金で旅館に居るのは心配になつて來たからと相談した。

檜山はその問題は彼れ自から解決するから安心するやうにと根津を慰めた。

その夜根津は彼の身元を詳しく話した。彼が京都帝大の獨法の卒業生である事は前から知つてゐたが、檜山と同村の小學校を出た高子を京都で知り、彼女の生活の一般特に人格を尊敬してゐる事を語つた。檜山に取つて高子は只同村と云ふ計りではない、檜山の東京遊學時代の保證人は高子の父であり、檜山は高子を眞面目な婦人として信賴し「姉さん！　姉さん」と佛蘭

西へ行くやうになるまで呼んでゐた人である。それから巴里、フランクフォルトから伯林からも彼女宛に手紙は出してあるが、彼女の消息は彼に取つて全く不明になつてゐた。その上檜山は地下運動の方へ入つてしまひ、彼女とは全く別箇の世界に生活するやうに條件づけられるだらうと考へてゐた。ところが今偶然！　根津の口から勞働運動に同情を持ち、唯物史觀などを眞面目に勉强してゐると言ふ高子の最近の生活を知つたのは一度失つた友をふたたび見出したやうに嬉しく懷しかつた。半封建的なそして資本主義的社會道德がどれだけ近代人の生活ことに女性の生活を壓迫し、拘束してゐたか、そして、その舊いモラールに盲從しきれない眞實を持つてゐる女性の正しく生きる道は何處に、何によつて求めるべきか？　高子の場合は！　彼女はそれを宗教に求めようとして出發した。しかし宗教は半封建的なことにおいて、資本主義的なことにおいて普通の社會より以上の罪惡から築きあげられてゐる點について、科學の存在しない暗い點について彼女の味方にはならなかつた。結局！　人としても女としても彼女は新らしい文化に歸着點を見出したのは自然であつた、その經歷と性情とから考へて。

二四年の八月、彼は彼女と別れた。そして彼はいままで西ヨーロッパにゐた、しかし見たものの考へてゐたことは極東にゐた彼女と同じであつた、從つて進もうとした目的物も同じであつたに違ひない。彼はそれとなく彼女の私生活について根津にたづねて見た、その時しばらく忘れてゐた彼女の姿を見るような氣がした。

（8）黨の會合

檜山の働いてゐた大學は九月二十日に新學期が開始された、商務あるひは外交官を養成する學校であるため學制が革正せられ學生は全部三年以上黨生活をした共產黨員ばかりになつた、そのため黨の會合は以前より倍加した。特にその當時はこの大學をレーニングラードの語學校と合併すると云ふ文部省側の案があり、學生側ではそれに反對して共產大學院の附屬にして內部を改造すると云ふ計畫を立てゝ黨の中央委員會に向つて運動し初めた。つい先日から學生側の委員は學長の無能を叫び出し、この學長を變へなくつては學生側の要求は貫徹しないと結論した、そしてとう〳〵不信任案を黨の集會に持ち出した。

その日黨の會合は朝から開始された。

――學長は日和見主義者である。

若い學生が三十年もボルシエビキ黨にゐた校長を批評しだした。

「わが學長はアカデミツクで實際的手腕に缺けてゐる」と非難するかと思ふと、

「われ等の校長ルーゼルをレーニンは解黨主義者と云つた」

と、レーニンが一九〇八、九年時代にルーゼル氏に付いて書いた論文をレーニン全集から引き出して攻擊する物好きもある。校長のルーゼル氏はツアー時代にはフランスに亡命してゐた。革命後はフラブダ紙のドイツ通信部長などをした履歷もあり、佛蘭西語が上手で、正直な人間である。

「君も知つてゐるでしよう、あの二人の學生ですよ、皆勞働者出ですよ、僕等の推薦でアメリカ行きを黨の中央委員會で決定したんですよ。ところがゲ・ベ・ウ・で反對するので駄目になつてしまひました。理由は彼等の緣者の中に修道院に入いつた人がある、と云ふのです。こゝでは黨の中央部よりは一調査機關としての××の方が強いですよ、ほんとうですよ！」

と、彼は秘密に檜山に話した事もある。彼はインテリ出であるけれ共、アカデミクでもビオクラトでもない。しかし學生等はさらに攻擊する。

「彼は自由主義者である」

他の者は學長は澤山の娘を……何時も電話で話すのは、婦人ばかりだ、と蔭口をたゝいたりする。

討論が終結して決を取ると、大多數で學長不信任案が黨細胞の大會を通過してしまつた。檜山は學長に氣の毒で棄權した。

六百人の共產黨員が七時間も討論した學長の不信任案、それから、學生の學制問題に對する態度も決定した。

檜山は、事務所で外國留學生の選定について相談を持ちかけられたので、少しおくれて校門を出た。

「檜山！　檜山！」

と、背後から彼を呼び止める聲がする。振り返るとベラである。彼女は支那科の二年生で黨細胞の書記をしてゐる。ゴリキー市の青年共產同盟から黨へ進み、モスコー大學の二年からこ

の大學の一年へ試驗入學を經て入いつて來た女である。中背で肉づきのいゝ、白色の顏、ブロンドの髮は人の好さそうなロシア婦人の典型である。その上彼女は若々しい美くしい聲を持つてゐるので、ロシア語を聞くのが非常に面白い。

「お前何處へ行くの？」

「あゝ、ベラお前か！」

と、檜山は何氣ない風で近寄つて來る彼女を待つた。

「お前この間待つたの？　住所が六ケ敷いのでとう〳〵行けなかつた」

と、彼女は檜山と約束しておきながら、それをはたさなかつた言ひ譯を、きまり惡そうにいひながら少し顏を赤くした。

「ベラお前最初に約束してから半年にもなるぢやないか！」

檜山はその年の春まだ早い頃彼女と散歩した時に、彼女が「お前にロシア語を敎へてやる」から一週に二度位お前の家へ行く、いゝだらう？

彼女は、こう云ふ案の提出者でありながら、今日まで幾度の約束も履行した事がない。彼女に云はせると、支那語が六ケ敷い、また英語もやらなくてはならないのみか、外の學課も決して平易ではない。その上黨の細胞の書記と云ふ困難な仕事がある、と云ふ。それはさうだ、支那科の學生で細胞の書記までしたんでは、他人を見てやるどころか、自分が他人から援助を受けなくてはならない位である。二人が十字街路に出た時、

「アレクサンドル同志！　あなたはどちらへ……寄宿舍なら一緒に行きましよう」と、彼女の苗字を呼んだ男の學生があつた。彼の態度はいたつて丁寧である。ベラは思ひ掛けない、と云ふやうな風情をして、彼の學生の方へ振り向いたが、表情をやわらかく、

「あたしあちらへ」と、青年學生の行かうとしてゐる反對の方を指し、その後は言ひ淀んでしまつた。

「一人で？」と青年は優しくまたたづねた。

「いゝへ一人ではありません」彼女はことによればついて行かう、と言ひ出すやうな青年をおさへ、その頭を二三度横に動かし、「本屋へ彼を連れて行かうと思つて」と彼女の横に手持無沙汰に立つてゐた檜山の顏を見て笑つた。

「あゝお連れがあつたのですか、アレキサンドル同志御免下さい、御免下さい……」

と、青年學生は又丁寧に詫びて足早く人雜みの中へ流れ込んでしまつた。檜山は默つて彼女に添つて街を歩いてゐた。

「お前何處へ行くの？」

彼女は今度は眞面目にたづねた。

「おれはお前に付いて來た」

檜山の答へが如何にも子供くさいので、彼女は憤き出し、

「あすこのマガゼンへ行かうね！」

と、心安く彼女自身からうなづいてみて「早く！　早く！　あぶない、危ない！」と檜山の腕を取りながら、自動車、電車、馬車の中間を縫むやうにかけ廻つて、ルビアンカの廣場を横切つた。二人はコンリモスカーヤ・プラウダの傍にあるテーゼと金文字で現してある化粧品店へ入いつた。此處も矢張り人の群でギチギチである。

「粉シヤボンを買つて來るわ、お前これを持つて待つてゐて、ね！」

とペラはその鞄を檜山の腕に渡し、徒列の中に雜つて順番の來るのを待つてゐる。彼女の鞄は書類や書籍が一杯つまつてゐる。

昨年の冬の事であつた。檜山は學校の食堂で食事を終へて茶を飲んでゐた。彼女は彼の傍へ來て食事を濟し、自から立つて行つて、コップに一杯の茶を持つて來た。

「これ砂糖？」

彼女は、彼の上にある小皿の中の白ろ粉を見ながらたづねた。

「そうだ」

と、彼女が何氣なく白色の粉末を茶の中へ入れてしまつたのを見た檜山が、クス〳〵笑ひ出したので、彼女は「ハテ」と思つたらしく、一サジ呑んで試みた。そして、眉間にそれともなく「怒」の神經質の集中を現し、

「鹽だ……ツプ、ツプ……日本人て奴はほんとうにずるいわ！」

と、惡口とは反對のその心の接近を表明した。その後も學校で會つた時、彼女は彼を人のいない廊下などへ呼び出して、

「お前お金を持つてゐる、少し貸してよ」

と、無口な彼に何處からかつながれ安い、取りつき易い隙間を與へるばかりではなく、黨細胞の委員會で一人の委員が檜山の惡い比評をしたのに對して彼女はそれをやりこめたので、しかもその方法が極めて彼女らしく露骨であつたため、皆の同志から笑はれたやうな歴史を持つてゐる。彼女と懇意になつた當座、わざと、

「お前結婚してゐる？」

と、たづねる。と、

「あたしもう純粋の娘ではないよ」

と云ふやうな返事をするだけで、それ以上決して言はうとしない。彼女は他の女學生等のやうに化粧も香水も勿論コケトリもしないが、身體に似合ふ色合、長さの服裝をしてゐる。よく學校の待合室の大鏡にその姿を映し見ては修正を忘れない。夫があるけれ共良友として持つてゐるだけで、異つた部屋に住み自分の姓名で暮してゐる。それでゐて彼女は決して女の解放についての共産主義者らしい説教をしない。黨の問題についても細胞以外に於いては決して口にしない。只、

「病れた。もういやになつた」

と云ふ程度であつた。彼女は人としては單純で溫い情操を持つた凡人である。が女としては一面的であると共に多角的な性質を持つてゐる。光があり蔭がある。そしてそれが時に變化する。彼女の生活はそうも例へられるかも知れない。其處に檜山の彼女に對する親しみが結ばれてゐる。彼はそんな事を思つて彼女を待つてゐた。

化粧品店を出た彼等はクレムリンの城壁を潛り、スベルドルフ街へ出た。彼女は其處から遠くないところに開設してゐる露店バーザに行つて、食物でも買ひ度いと云ふのであつた。

社會主義の國家であるロシアでは、總ての生産や販賣及び購買の機關が國家に獨占され、食料品は一定の量を國營販賣所から公定價格によつて賣却される。然し第一五ヶ年計畫が實施されてから農村生産にクリスを起し、食料品の生産力減退は供給率を極度まで制限し、國民生活を脅すやうになつた。その現象としてソビエトの國是と相反する非社會主義的個人の資本による賣店がまた急激に發達した。ソビエトの商人、乞食のやうな小商人はモスコー内の目抜の

大廣場、あるひは辻角に出て來て、荷車、箱板、新聞紙の上に、ひどいのになると前掛の中や地べたの上に日常生活品、特に食料品を列べて賣つてゐる。そして彼等の前に買ひ出しに來た市民群がどよめいてゐる。

――ア、馬鹿に高いね……それにこれは腐つて居りやしないこと……

女市民等は小商人の品物と價格を比較して思案顔である。

「お前さんに買つて貰はなくても客はいくらでも……」

豚眼のユダヤ老商人はそんな面をして意張るものだが、品物を盗まれはしないかと、客の方を注意しては見廻してゐる。

ベラは普通の人のやうに決して饒舌らない。彼女は物品を眺め、定價を聞いて欲しくなければ返して何とも曰はない。

個人市場を一と廻りして、一番端に出た時、彼女は手携箱に玉子を並べてゐる老婦人を見出した。

「玉子が欲しい……」

と後戻りした。その玉子は一個一ルーブルすると云ふ！

「ベラ非常に高いよ、公設市場では五カツピイクか八カピイクではないか、二十倍もする…」

「でもあれは子供だけよ、あたしには子供の切符はないんだもの……」

彼女は二個買はうとしてゐる。

「婆さん拾個下さい、それ十ルーブルお取り」

「お前……そんなにいらないわ……」

彼女の制するのを聞かないで買つた玉子を見て彼女は嬉んでゐたが、では半分づゝにしやうと云ひ出した。

「お前持つて行け、今度おれが行つた時に喰べるから……」

ベラは幾回も玉子を新聞紙で包み鞄の中へ入れた。

「お前あすこのシネマを見た？」

彼女はすぐ眼の前にある大きなメトルポールの建物を指した。

「行かうか、まだ時間も早いし！」

と云ひ出した。彼女は檜山に默つてその鞄を渡し、上半身を前へかゞめて、手早くそして隱すやうに膝の上を小しまいに上げ、左の手で押へながら靴下のゆるみを直してゐる。

二人は正面の入口からホテル・メトロポールの階下へ入いつた。其處には何處かの組織によつて經營されてゐるクラブがある。ベラは一人二十カピツクの入場料を拂つて「これでシネマが見られる」と切符を檜山に見せた。何をやるだらうか知らないが、二十カピツクの入場料は玉子一個一ルーブルに比較してあまりに安いやうな氣がする。

ロシアの建物の多くは暗いが、此處では天井もガラス張りで明るい。帝政時代には立派なレストランがあつたと思はれるが、今ではその跡へシネマを移植をしたらしい。特種のクラブ組織であるためか場内は空席が多かつた。二人は活動をやめてゐる憤水池の傍に席を取つた。消燈され、室内が暗くなり映畫が動き出した。バクウ市あたりを背景にした革命の宣傳映畫である。ベラは檜山の左の手を取つてその膝の上に置き、

「お前わかる……云つてよ」

說明する檜山は、シネマにはあまり興味を持つてゐない。

「ベラ、ベラ」

と、彼女に頻りに話しかける。彼女は默つて聞いてゐるが、何とも答へない。そのうちに、

「今日は都合がよくない、この次の休日の前にきつと行く、本當よ……」

と、體よく逃げ隱れてゐたが、

「そんなら行くよ、然しすぐ歸るわ！」

と、とう〳〵拒絕出來なくなつてしまつたので、檜山の家へ今夜行つてみようと承諾した。

二人はシネマを出た。街道は秋の夜がすでに下りて、もう電燈が點火してゐた。彼等はまたマガジンへ入いつて食物を買ひ、乘合自動車に入いつて、しばらくの間座つてゐた。

赤煉瓦で作つた十階の家、入口には鎌と槌とを組合せた中にプロペラー、銃、車輪などを取り入れた鑄金の大きなマークがある。これはソヴエトの直接持つてゐる家屋である。その家の五階の一室が檜山の住居である。電力および技術能力の節約のために、室内エレーベーターは運轉しない。十階まで三四度腰を下して「息を切つて」昇る人々も澤山ある。

「あゝ疲れたわ、お前小さいのに、隨分高い處に住んでゐるね……」

ベラは大きい呼吸をしながら檜山を冷かした。

「何！　それでもお前より大きいだらう、いやほんとうに少し、だがこれこの通り」

檜山は子供のやうに肩を聳して、ベラと背の丈を比べて見てゐる。彼女は苦笑しながら、

「馬鹿ね！　あたしはロシア女として大きくない方だわ！」

二人はまた階段を上つて行く、上から厚く化粧して裝り立てた有閑婦人の手を取つて一人の將校が下りて來た、すれ違ふと、

「あれ、ゲ・ペ・ウの役人ね、こゝに居るのね……」

「あゝさうだよ、この家には何しろ二千五百人以上の人が居るさうだから、中央委員會の人も赤軍の指導者達もゐるさうだ。然し今行つた奴はゲ・ペ・ウの自動車で毎朝あの女と散歩し、この夏などは毎朝水泳に行くまで自動車を濫用したさうだ。……あゝ此處だよ」

檜山は額の汗を拭いて、大きなドアを開けた。廊下を少し歩くと、左に共同の勝手場があり、浴場があり便所がある。そして最後の一室が檜山の部屋である。スイッチを入れると二箇の机上ランプが人造絹糸を透して赤い光を反射させる。窓からは夜のモスコー河クレムリンあたりの火の光が美しく輝いてゐる。

彼女はマントーを脱ぎ、シャツポーを取つて壁に掛け、安樂椅子に腰をかけた。そしてしばらく吐息をしてゐたが、

「お前この部屋は悪くないわ。二人でも住めてよ」

と、珍らしさうに部屋中を眺めてゐたが、ふと立ち上り、

「これ着物！　お前着るの、これ？」

と、彼女は檜山の寢卷にしてゐたフランの一重を、その肩に掛け袖や裾の格好を見てゐる。

「あたしは日本の婦人に似てゐる？」

彼女はシカフの鏡の前に立つて、その姿を映して自から自分を眺めてゐる。

「ベラ、お前一人で何かいゝ本でも讀んで居てね！　僕はこれから夕飯を作るから、お前のために今夜日本の食事をお馳走するよ」

「そんな事をすればおそくなるわ！」

「ベラチカ！　お前一人で歸れるだらう。いつかおれに、あたしもう純粋の娘でない、と云つ

たのを覺えてゐるだらう！」

「寄宿舍へ、おそくなつてから歸るのは都合よくないわ」

「叔母さんの家へ行つてゐた、と言へばいゝだらう」

「お前、あたしの叔母さん！」

と、ベラは憤き出したが、席を立つてナイフを取ると、白菜や馬鈴薯を切つたり、皮をむいたりし初めた。檜山が机の上をかたづけたり、食器を列べたりしてゐるうちに、電氣鍋や釜の中の食物はもう出來上つたらしい、食慾を促すやうな食物の香ひが部屋中に滿ちた。彼は南側のガラス窓を少しあけた。

彼女は勝手の方から洗つた食器を持つて來て、押入や戸棚に入れたり、綿布でふいてゐる。

「あゝあなたの處ではお客さんですか、新聞が來てゐますよ……」

隣のリパのお母さんが伯林から來るインプレコールを持つて來て呉れた。

「檜山あたしはこんな勝手仕事も好きだよ、お前あたしが、彼から離れゝば取る氣がある？」

よく肥えたリパの母親が部屋から出て行つてしまふと、彼女はそんな戯談を云つた。

醬油がないので、バタと砂糖と鹽で間に合せたスキ燒は惡くなかつた、御飯もよく出來た。

彼女は初めてであるが、

「氣に入つた」

と、云つて珍らし想に匙を動かしてゐた。

少しのコニヤツクを飲んだのと、多量の食事をしたので、檜山は少し疲れて安樂椅子に座つてしまつた。ベラは食器をまた洗ひ、机の上を取りかたづけて茶を入れて呉れた。

「ベラお前が主人でおれが客になつたね」

「あゝ、そう〳〵お前の洋服のひじが裂けてゐる、この間からついでやらうと思つてゐた」

彼女はいつの間にか糸のついてゐる針を取り出して、檜山の座つてゐる傍へ座り、針仕事を初めてゐた。

「ベラ、もう澤山だ、何か話さう」

檜山は無理に彼女の手を取つた。そして、彼女が前に少し話したニジノブ、ゴロド市、それからモスコー大學時代を話させた。

「ベラ」

檜山は彼女の耳元へ何か囁いたが、彼女は笑つたきりで返事をしない。

「お前澤山女を持つてゐるだらう、それでゐてまた、あたしを欺さうとするの？　あたしは知つてゐるから。あゝお前醉つてゐるね、いやだ！」

彼女はその肩をズツト引かし右の手で輕く檜山の頭を反對の方へ押したが、檜山は又彼女に肩をつけ合つてしまつた。

「お前この間の夜二時に、カチウシヤを家まで送つてやつたでしよう、彼女はあたしに話したわ。然しお前はあたしにそれを秘密にしてゐる。それからボーリヤや、ワーリヤの支那や印度科の女學生等も、お前を目的にして日本科へ轉科するなんて騒ぎ出したし」

彼女は意外の事を口走つた。

「ベラ、彼女とおれとはそんなに親しくないし、おれはお前を彼女等と同樣の女だとも同志だとも思つてゐないよ」

「それは信用出來ないわ、お前は彼女等にお前の本を贈つたり、またこの間林檎買ひに一日がかりでモスコーから遠くへ行つただらう、彼地で何をしたの……一體！」

「本はお前に一番先に贈つたと思ふ。林檎買ひだつて、おれはお前の家へ行つたんだよ、お前は居らなかつたから歸らうと思つてゐると、彼女等と一所になつてつひ遠方へ出かけた。然しその歸りにはお前の家へ寄つて來たらう？」

「そんならいつか會合の歸りに、あたしを送つて行つた時、何と言つたの……あんな言葉が眞面目な女に云へた言葉ですか……あの時お前は、あたしを……」

彼は彼女の言葉を聞かなかつた。

「あすこを」と、彼女は怖れるやうに、指で開いてゐる窓の光を指した。

第四章　インテリゲンチヤの末路

一、十年後の邂逅

四年生の歴史の講義に出なくてはならない時間である、檜山は教室へ入つた、學生は三四人しかゐない、どうしたのか？　と聞くとまだ始業のベルが鳴らないと言つた。

學生はグループになつて雑談してゐる、檜山は雑誌を取り出して讀んでゐた。と、

「先生、あなたは日本でお目に掛つたようなお方で御座いますけれども、ついお苗字は忘れてしまひまして」

と、丁寧な日本語で語り出した、檜山はその年増の女學生を見た。鼻の高い、黒髪で無帽で大柄な女！　彼女の云ふまでもなく何處かで見たような女である。

檜山は思ひついた、丁度十年も前に神田のある夜學校へ行つて佛蘭西語を學んだ、その時彼

女！　この女は中等科の教師であつた。

舊い型の教師であつた彼女は文法の暗誦にと言つては原文を一頁も暗誦さし、冠詞や動詞の變化までやかましく訂正した。

ラ・マルシーエーズなども彼女のお蔭で今迄追憶してゐる。

彼女は日本に居られなくなつたそのため困難をしてロシアへ歸つた、彼女の夫は帝政時代のペテログラード大學東洋語學部日本語科を卒業してゐる。であるからモスコーの東洋大學の教授になり、またクリスチヤン・テルン（國際農業問題研究所）の日本部長にもなつた。

しかし彼女は語學が出來るだけでソヴエトの基本的專門教育を受けてゐないために、學校へ願つて學生にして貰つた。從つて昔の先生は今日は反對に學生となり學生は先生となつて再會したのであつた。

彼女は以前、夫の姓を名乘つてゐた、しかし今度は自分の姓に戻つて、學生の仲間では小娘のようにジナ、ジナ、と呼ばれ、また自分でも稱してゐる。

日本に居た頃、彼女は小ブルジョア・マダムとして、スカートの長い、異人臭い麥藁帽子をかぶつて、外國雜誌などを持つて歩いてゐたのに、大變な變化をしてゐる。今では、外見だけにしろプロレタリヤ風に、言葉なども農村や工場から出て來た純ソヴエトの學生と變化ない。

授業が濟むと彼女はその夫の教授に紹介した、彼女の夫はその頃ソヴエト・ロシアにおける日本文化研究の權威である、著書もある。

「遊びに行きましよう。今日是非」と言はれたので、學校の責任者の許可を得て彼女の夫に附いて行つた。

初めて通る道で何處が何處だか判らない、中央統計局がある、少年犯罪者研究所がある、ドイツ人だけ集まると言ふプロテスタントの教會がある、その教會と隣合つた二階建の家、

「こゝです」

と、六尺以上もある教授は暗い表戸を開けて案内して呉れた。

二階は四室ある、一室は勝手でプリモスが二臺大きな鍋を掛けられてゐる、溫度が廻つてゐるので、ドカンと暖氣に取り卷かれた。

女中だらう、太い大きなお婆さんが食堂でサマワールを沸してゐる、食堂の次には寢室があ

る、日本から持つて來た繪葉書、版畫などが壁に掲げられてゐる、エクゾティクな感じがある、それから彼等夫婦と一人の子供などの寫眞もある、左側の部屋は書齋になつてゐる、レーニン、マルクンの肖像畫、それから教授自身の寫眞などが掲げてある、東西の壁には六尺以上の本箱が二個、あらゆる國語の書籍をギシツとつめ込められてゐる、日本語の本も相當ある、直接注文するものや知人を通じて買つた物であると言つた。

――プロレタリアト政權の確立してしまつたロシアへ歸つて急速にマルクシズム、レーニンニズムに武裝して立派な顏をしてゐる。

多くの非黨員の教授たちは、皆マルクス、レーニンを讀むでゐる、しかし彼等のマルクシズム、レーニンニズムは非常に危險である。彼は時によりその利刄をプロレタリアトの方へ向けて來る。

と言ふ話しを聞いた。ことによるとこの先生もそうかも知れない。

モスコーでは共產黨員はこと更、勞働者の黨員でも一家三人で三つもの部屋を持つてゐるものはない、しかしこの教授はどうして手に入れたかそんなに多くの部屋を持つてゐる。

「部屋代に四十ルーブル、勞働組合費に三十ルーブル、七十ルーブルも支拂ひます」

と云ふ、しかしこの教授は二ケ所で働くので一ケ月五百ルーブルも取つてゐる。

最高給を取る共產黨員の二倍である。で、現在のインテリの最高給と言つていゝだらう。

米があるからと云つて、米の飯をたいて呉れた。それから、送つて貰つた物であると云つて奈良漬を出して呉れた。

この教授は檜山に對しては非常に親切で、日本語を知つてゐる女優を紹介してやらうなどゝ言つて呉れた。

檜山は少し遲くなつて家へ歸つた。アレキサンドルは母を相手にウオツカを呑んで大分いゝ氣嫌になつてゐる。

「何處にゐた？」

と、尋ねたので正直にコンスタンチン教授の家に行つて來たと答へる、彼は非常に不氣嫌になつた。そして露骨に―ペッ、ペッ―と床につばをはき、

「お前は何と言ふ愛想の盡きた男だらう。いくら知人でも何でもあんなブルジョア教授の家へ

遊びに行くなんて！　あれはわれ〳〵とは違つた人間だ」

アレキサンドルは憤慨して泣きたいような顏をしてゐる。

「母さん、あなた出て行きなさい。あなたには聞せられない話だ！　早く出て行きなさい！」

アレキサンドルは母を追ひ拂はうとして喧しい。

「檜山、彼は醉つてゐるから決して相手にしないで！」

彼の母は小聲で檜山に耳打ちして部屋から出て行つてしまつた。

アレキサンドルは食事を檜山にすゝめながら、

「お前彼等がどう言ふ人間だか知らないだらう！　彼にしても彼の妻にしても仲々喰へない手合だ。……彼の妻は夫婦喧嘩をして法律上の獨立をしてゐる、それを口實に學生並の給費料を呉れろと學校に迫つた。五百ルーブルも一ケ月取る上、さらに！　あの教授は學生のうちでも階級意識ののろい奴等をだまして一つのグループを作り、自分の位置の顚覆しない計畫をしてゐる、あれはわれ等に取つて最も危險な人物である」

アレキサンドルは幾回となく繰り返して二度とコンスタンチン教授の家へ行つてはならないと口說くのであつた。

（1）コンスタンチン教授の死

コンスタンチン教授は學校の方へも農業問題研究所――へも姿を見せないようになつた。

ある日學校の廊下で偶然彼の妻のゼニヤに會つた。

「彼は病氣ですわ、心臟が惡いので！」

で、彼女もその看護のため時々學校を休むのである、と、常よりは心配顏して物語つた。

コンスタンチン教授は日本科の科長にあたる人であつた、彼に缺席せられると學生も教師もまた學校の方でも困つた。特にカムチヤツカや沿海洲さらに日本、アメリカ等へ實地見習ひのために派遣されてゐた三、四年生についての考査試驗だとか特別講義などについても彼の出席を必要とすることが屢々あつた。

學長代理の命もあつたので、ある日の午後檜山はゼニヤに附いて、彼女の夫の病氣を見舞ひに行つた。

コンスタンチン教授は食堂の次の寢室に病んでゐた、僅の間見なかつたうちに顏は痩せ衰へ、自然のまゝに生へ延びた髪と鬚は、彼のうちにあつた若々しい表情などを奪ひ去つてしまつた、神經質であり非常に負け嫌ひであり、競爭者について異常の警戒をしてゐるらしい彼に學校の教務の話をするのは考へ物である、

「あつちの部屋で話して行つて下さい」

心臟の痛む彼は檜山にそう云つた。

檜山は食堂の椅子に腰を下してジエナの話し相手になつた。

彼女は三十だと云ふがウクライナ生であるため黑髪であり、體格が頑强に出來てゐるため少しふけて見へる、時々その大きな眼を見据へたり、肩で呼吸をしたりして小聲で話して行く。

「最初、彼が病氣になつた時にはこんなことにならうとは知らなかつたから、いゝ氣味だと思つたのよ、でも彼は過去の一年間あたしを隨分苦めたわ。學校から、研究所から歸つて夕食をすると、すぐ外へ出て行くのよ、一晩だつて子供やあたしと家に殘つてゐて呉れたことなどありませんでした、……今日も電話を掛けて來たんですが、彼には若い女があるのですよ」

「女優ですか？」

「否、タイピストですよ」

奥から彼女の夫が低い聲で呼んでゐる、彼女は座を外して立つて行つた。

檜山はコンスタンチン教授夫婦のある一部の生活についてある學生から聞いた。

「彼の妻はある日同級の學生達に招かれて學校の寄宿舍へ遊びに行つた、學生達は酒を呑んでその上彼女との上にスカンダールを起した。それだけではなく學生達は、そのスカンダールを學校へ來てから多數の者に吹調したので、コンスタンチンは妻の不德行に憤慨して離婚してしまつた」

またある學生の云ふには、

「ジエナはある學生と戀仲になつた、その話しを嬉んで夫のコンスタンチンに打ち明けると、彼は非常に憂鬱になつた。ところが半年程經つとコンスタンチンは女優か何かを發見して、それを妻に麗々しく發表した。彼女に對する復讐の意味において、從つてジエナは反對にヒステリーになつてゐる」

事實であるかも知れない、しかし嘘であるかも知れない。若しかすると彼等夫婦の間にはお互に何かを持つてゐる。そして互に默つて冷たい眼で眺め合つてゐたことは事實である。

その上今日のジェナの言葉によつてもコンスタンチンの生活の一部は判つてゐる。

夫の用を達して來たジェナは相變らず青い顏を曇らしてゐる、しかし檜山にはわざと元氣を見せてサマワールの茶をついで呉れたり、白パンに櫻んぼうのチーズなどを附けて推める。

「主人は澤山の月給を取つてゐましたが、その女のために隨分お金を使つてゐましたし、また無職の弟にも送金をしてゐましたから、自分が病むとなると、もう一文の蓄へもないのです よ、學校の方でも永らく休めば本給は呉れないし、病院はいやだと云つて、家で病んでゐれば醫者の往診料に莫大の金を取られますわ。昨日大學の教授をお願ひ申しましたら一回五十ルーブルですよ、……うちでは澤山のお金が必要ですから、しかたがありません、日本で買つて來た紺サージの洋服がありますからあれを賣らうと考へました、多分五六百ルーブルにはなるでしよう、あたし、これから廣告文を書くわ、そして夕刊の賣買案内欄へ賴もうと考へてゐます」

ジェナはロシア、フランス、英語、日本語をごちや混ぜで話す、檜山も彼女と同じ樣な調子で聞くのであつた。

(2) 教授間の軋轢

檜山がかけ持つてゐた學校の學長代理はタスの通信員をして永らく外國に行つてゐた人であつた、彼は純インテリ出身で革命前は天津の總領事などをしてゐた。日本も知つてゐる、彼は舊ロシアのインテリの急進分子のように早くから政治運動に沒頭してエス・エル黨の左翼分子で一九一七年のペテログラードではボルシェビキーとコンプロミションをしてソヴェト政權を支持した方である、その後二四年頃に至つて入黨し、今日ではモスコーにおける東洋通として有名である。彼が若し純粹のボルシェビキーであつたなら今頃は黨の內部の最高部にゐる人であらう、と、彼を知る人が言つてゐた。

その彼れが學校へ來ると、第一に日本科廢止、支那科の擴張、また講師、教授に對しては時間給を原則として休講の場合はそれに準じて俸給を差し引く、と云ふ案を教授會に持ち出した。その案によつて多大の影響を受け、生活の安全を脅かされるのは非黨員の語學の教師達で

ある。

彼等はまづ個人々々に話し合ひ、さらに團體的に結合して新らしい學長代理に公然と反對し初めた、そしてストライキでもすると云ひ出した。

新らしい學長は感情的に强硬になり、あくまで原案を支持貫徹しようとして、

「あんな非黨員の語學の講師達がストライキなどしたつて、こつちは怖くない……獨逸語や佛蘭西語を話すような者はモスコーでは夜來の女でさへある。十五人や二十人の講師なら、おれは明日にでも集めて見せる」

と、暗に豪語し對抗してゐる。

新學長代理の言ふところによれば、この學校の講師にはネプマン的の奴が非常に多い、今度の反對運動は言はゞ階級闘爭であり、また彼等の黨に對する反抗であると。

―學校は今そうした危險の雰圍氣の中にある―

黨の細胞はこの狀勢を見て取つて擴大委員會を開いた。

多數の黨員によつて忌憚なく彈劾され批評されたのは教授、講師の不熱心の指導方法であつた、學生の主張するところによると、コンスタンチンは階級的に見てもイデオロギーの上から見ても、ソヴエト政權の友ではない。

反對に彼は反革命の全身にソヴエト文化をまとふて變裝してゐる、今日までの彼の指導方法はいつでも反共產主義的であつた。クラスの一番二番はかならず非黨員の學生をすえる、外國派遣の學生の選拔についても非黨員學生を第一に推薦する、それから階級的コンセプションのない黨員學生を自分の味方に引き入れ、彼に好感を持たない黨員學生を落第させ、退學させようとした。

今日ではすでに十幾年、ソヴエトの政權は確立しプロレタリアトの專門的カードルも確定しようとしてゐる。從つて反革命分子はソヴエトの教育組織から排除してやつて差し支へない。

非黨員の教授講師不統制については罪はむしろかゝる暴案を提出したる學校當局者にある、學長と學長代理とは紛議の中心となつた新提案を撤回すべし、と云ふ決議が出來て學校騒動を未然に防いでしまつた。

この紛爭の結果高給を取つてゐる非黨員の二、三の教授が免ぜられた。コンスタンチン教授

については、

「今月中に教鞭を取る可能性のない場合は罷免する、よつてそれを豫告す」

と最後的の通牒が送附されたさうである。

病める教授はその通牒を受け取つて、讀むや否や俄に病勢は進んでつひに絶命した、と云ふ噂が誰れからともなく傳へられた。

學長代理は十二、三年前エス・エル（社會革命黨）左翼としてボルシエビキー黨と共に、外務人民委員會が働いてゐた、その下にコンスタンチン夫妻は使はれてゐた、で彼は「十月革命」に際して、コンスタンチン教授がどんな態度を取つたかよく知つてゐる。「ロシアのインテリが勞働者政權に對してサボタージーで答へた。しかし、コンスタンチンは逃走によつて答へた」

學長代理は―コンスタンチンは誠にいゝ時に死んだ―と、附け加へ彼の死が時期におくれてゐなかつたことを喜んでゐた。

（3）火葬場

死んだコンスタンチン教授の葬儀について、學校の職業組合の委員會では校葬にする決議をした、生前の彼のソヴエト政權、あるひは學校に對して取つた好しくない態度に對して格大の特遇である、と、ある葬儀委員の一人が云つてゐた。

その日學校は休校になつた、前夜通夜をしてゐた學生、教授の數人は棺を學校の大講堂に運んだ、そして一般の人の告別を許し、約四五時間安置されてゐた。

檜山は少しおくれて學校へ行つた、弔旗の翻る校門を葬儀の行列が出るところであつた。

一個分隊の赤軍の音樂隊が先頭に立つてゐる、それから校旗、各科の旗、職業組合の旗が黑章を附せられて進んでゐる。棺は二頭の馬に引かれ、花環によつて飾られてゐる。

棺の後には喪服を附けた彼の妻と子供、それから親屬の者が從ひ、その後へ學生、教授、知人等が列んでゐる。

弔旗をひるがへしたこの行列はモスコー市を出て、それから雪路を一時間も行進した。

廢止された修道院の高い大きな壁、更に其上に聳え立つ鐘樓、十字架が曇天に浮んでゐる。」

「ツアニズムとゝもに榮え、ツアニズムとゝもに滅びた」

人々はこの廣壯な建物を過去の文明の遺物として眺めるのである。

黒烏の集團の住居してゐる、この修道院の近くに火葬場があつた。ソヴエトの新しい建築にかゝり、最近式の設備になつてゐる。

近親の人々によつて棺は馬車から下ろされた、それから自働的の火葬臺に据へられた、そこで最後の告別式がすむと火葬臺は階下に沈んで行つてしまい、ガスによつて燒かれるのである。

檜山は幾日かの後コンスタンチンの家を訪ねて見た。前にゐた下女は解雇され、部屋は一つ取り上げられてゐたが電話はまだあつた。

遺子は十歳になつてゐた、職業組合では法規により彼に月四十ルーブルの補育料を支拂ふとの決議をした。

小さな壺に入れられたコンスタンチンの骨は、彼が生前働いた農業問題研究所の中庭へ埋められた。舊いインテリとして危い生活の道を辿つて來たコンスタンチン氏の一生はこうして終つてしまつた。

五月一日祭のすぎた後であつた。檜山は久し振でジエナに學校の廊下で會つた。

うす化粧した彼女は、微笑しながら檜山の方へ近寄つて來た。

「あたし結婚しました」と、新生活を披露した、彼女の夫になつた男と云ふのは十歳も年下の旅行案内所の事務員ださふである。

「あの男はまだ若いのに親や兄弟と絶交してあの女と結婚したそうだ。あんな狼のような未亡人の何處がいゝだろう」と。

密り集まつて彼女の噂をしてゐた學生達は笑つた。

(4) 二人の女優

北山氏はモスコーに永らく住居してゐたゝめに、澤山の知人を持つてゐた。そのうちで特に變つた色彩はクズコバ女史であつた。

クズコバ女史。彼女は別に社會的な地位も技倆もある女ではないが、北山氏はそう云ふ敬

稱をつけてゐた。

クズコバ女史はまだ三十前であつた、彼女は小貴族出らしかつた、しかし、その家族は彼女を殘しておいてラトビヤの方へ逃げて行つてしまつた。

彼女はその後赤軍の將校と結婚した、そして間もなく離婚した。彼女の言ふところによれば彼には先妻の子供もあつた。それはまだいゝとして、嘘をつく、それであつさりと離婚したのである、と言い、北山氏の言ふには彼女の夫は亂暴で彼女を暴力で懲らす、そのため同棲することが出來なかつたのである。

獨身になつた彼女はしばらくの間失業してゐた、北山氏の好意によつて職業組合に加入することが出來、同時に月九十ルーブルでコーペラチーブの會計係に雇ひ入れられた、ところがしばらくすると、コーペラチーブは潰れてしまつた、從つて彼女はまた失業に陷つた。

丁度其時檜山は彼女に紹介された、太つた丸顔の頬の赤い彼女は金髪を束髪に結つてゐた。英語と佛蘭西語とを上手に話す女であつた。

檜山は彼女からロシヤ語を敎ることにした、一週間三回彼女の家へ行くのである。

赤く塗られた支那大學の寄宿舍の横をしばらく行くと、大きな練瓦建の家がある、そこの一階二番目の部屋の扉に細くクズコバの名が書れてゐる。

部屋は細長い獨身のクズコバ女史の住みそうな部屋である。

小さな寢臺が一方の壁について置いてある。

反對の側に小さな机がある。その上にはアレキサンーダーのロシア辭典その外にモーパツサン、ドーデーの本の古びたのが二冊だけ置いてある。

向ふの方の食器棚にはいろ〳〵の食器が飾られてゐる、その中の茶飲み茶椀の一つを女史は持つて來た。

「これはツアーの使用したものですよ」

金の蒔繪のある、そしてロマノフ家の紋のある一つの茶器をことさらに見せた。

顔は新らしい、しかし精神は舊い、このクズコバ女史に從へば昔は「良かつた」が、今は「惡い」、そして共產主義者は「特權階級」であるそうである、ところが彼女がその兩親の居るラトビヤへ行こうとすれば、ラトビヤの總預事館は、

「彼女は赤い！」

と、云つて入國を許可してくれないと言ふ。」

この話を聞いた北山氏は、

「ラトビヤは小さい國だけあつて、頰べたの赤い女にまで怖れてゐるッ！」

と、苦笑した。

彼女のところへは妙な人々が來る。佛蘭西に留學したことがあると云ふ六十餘の元女學校の先生、赤軍の服裝した三十格好の婦人、それから五十を越した背の高い老婆は若い娘を二人連れて來る。

彼女等は手製のヴアレニイを喰べながら永いこと話してゐて、その上きつと失業のクズコバ女史から三、五ルーブルを借りて行く。

――戰に敗れて生の隨性だけによつて無氣力な生活をしてゐる人々――

檜山は、彼等貧しい哀れな舊いインテリゲンチヤを見ると獨りそう思つた。

ペチロスキー公園の近くへ追ひ拂われ廢寺の軒へ、小屋を建てゝ水を汲むだり、薪を割つてゐる舊い將軍達、地下室の物置きの中で石油ランプを點して奇怪な生活をしてゐる昔の工場主の妻、盲目になつた餘生を街頭で行人の情を乞ふ舊帝室の女優、クズコバ女史の部屋へ集まる人々も矢張り彼女等と同じ宿命に襲れた人達である。

檜山は、ある夜また例の老婆と一緒になつた、彼女はその夜は美くしい二人の娘を伴つてゐなかつた。

クズコーバ女史の家を去るとき、檜山と老婆は連になつた。

雪の夜道はもう通る人は稀である、大通へ出ても老婆は電車に乘らない、健脚で、歩く方である。

老婆は歩るきながら昔覺へた佛蘭西語で、

「彼女等……姉は二十二で妹は十七です、二人共金のために結婚してゐるんです。姉の夫は鐵道の技師で五十六歳、もう彼女より大きい息子がある人ですよ、妹の夫も五十を越した化學工場の技師で地方へ出張してモスコーにはほとんどゐません、妾の夫はツアー時代の裁判官であつたゝめ、今日ではモスコーで生活することを許されません、彼はシベリアに追放され

てゐます、ですから毎月幾らかの食料品だとか、小使を送らなくてはなりません。娘の亭主などは、娘は貰つたが親までは貰わないと云つて差し入れに相當する僅かの物質の補助さへ承諾して呉れませんわ。ですから私が自分で手内職を探してその賃錢で、ようやく夫に送品するような狀態です……」

老婆はサマチヨーチナヤの街に來るまで話し續けてゐた、彼女は二階から燈火のさしてゐる部屋を差して、

「若し獨逸語の會話を習ひたかつたら、姉娘から習つて下さい、報酬は安くていゝでせう！」

と、言つて別れた。

その後二、三日の後檜山はストラスノイの廣場でまた偶然と老婆に會つた。彼女に誘れるまに、その上幾分の好氣心も持つてゐたので彼女等の家を訪ねて見た。

コーベラチブの二階にある部屋は相當に大きく三方はガラス窓で立派である、只内部の家具が不釣衡な古物の寄集め許りで如何にも敗殘の餘生を送る過去の支配階級らしく悲慘であつた。

部屋には二人の娘がゐた、姉は獨逸語を、妹は佛蘭西語を自由自在と言ふ程語す。ソヴェトの學校へは行かなかつたと見へ、コンムニズムには全く無關心であり、盲目である。

壁に彼等の家族の寫眞が掲げられてゐる、妹娘の說明するところによると軍服のは祖父で陸軍大將、文官の大禮服は父で高級の裁判官、最後にまだ若い海軍將校の寫眞は叔父さんでバルチツク艦隊で東行し、對馬の海戰で戰死してしまつた—あなた方に殺されたわ——

彼女はそれまで話すと椅子から立ち上つて、「チヨンキナ」を歌ひながらスカートの短いのも遠慮せずダンスをして見せた。

「パレトの學校へ三年も行つてゐるけれども、まだ卒業出來ない、從つて獨立した女優ではない、姉の方は何處へ出ても一人前の給金は取れる」

妹は彼女の毎晩踊つてゐる舞臺へ訪ねて來るようにと、アドレスを書いて、その上招待券までで呉れた。

妹の女優が晴れやかで浮いてゐるのに反して、姉の女優は氣重く憂鬱である、多分その夫が母に對する穩でない狀況からであらう。

「獨逸語習ひたいつであなたなの……あたし時間はいくらでもあげますから、その代り月に三

十ルーブルよ……あたし今一文なしで今朝母と喧嘩しましたわ、あなた十五ルーブル前借を許して下さい！　あなた、一ケ月に幾程取るんですか？　ではそんなに澤山ではないのね、あたしになど散財出來る」

姉の女優は早口に口から出まかせのことを言つてゐる。

チヤイコスキーの物を歌つてゐた妹はふと立ち上つて隣の部屋へ行つたかと思ふと、白色のエプロンを掛けた十五、六の小娘を引つぱつて來た。そして、

「あなた、この娘と結婚しなさい、彼女は大きい部屋に一人で、今お婿さんを探してゐるけれども少しも見つからないわ、ね！　ホツ、ホー」

小娘はとてもかなわない、と言ふようにエプロンで顏を隱し自分の部屋へ脫兎のように逃げこんでしまつた。

次の日の晩檜山はクズコーバ女史の許へロシア語を習ひに行つた。部屋へ入るとまづ一番に老婆の家へ行つて二人の娘達と會談したことについて聞かれた。

「あの姉妹は顏は美くしいけれども心は惡人ですよ、あなたからも金だけ取つておいて獨逸語なんぞ半月と教へないわ。……妹は姉より人は好いけれどもだらしのない人よ、昨年の夏イルクツクのコーペラチプの代表をしてゐるコーソモールの人が彼女と知り合ひになつて一ケ月モスコーに居て二千ルーブル散財してしまつたわ。公金を……彼女と遊べば郊外へ行くにしても決して電車では行かずに、馬車か自動車だし、レストランへ行つても一流のところだよ、だから一と晩に百ルーブル位何でもないのよ。……彼女は今きつとあなたをその手に掛けようとしてゐるわ」

クズコーバ女史は盛の過ぎたバラである。色もなければ薫もない。たゞその舌がトゲのように男を刺す、彼女はもはやそれだけによつて自分を護つてゐる存在である。

二人の女優は未だ若く美くしい。しかしその美は過去のまた不純の美である。腐亂した生活の中から出て來る平凡な技藝を賣る盲人の生活である。明るいところで正氣の人が見れば愚かでうすぎたない存在である。

「彼女等のところへはもう行くまい！」

檜山はそう考へた。それ以來クズコーバ女史の家へも、二人の女優の家へも決して行かなか

つた。

その後しばらくの月日が經つてからである。最初彼女を紹介した北山氏にその話をすると、

「君は彼女等に深入をしなかつてよかつた」

と、それ以上は話さうとしなかつた。

二、ウダルニク（突擊隊）

「五ケ年計畫は世界革命の計畫である」

と、黨はその五ケ年計畫を四ケ年に完成さしてしまおうとした。モスコーのあらゆるソヴエートの機關はその成員を工場へ！　工場へと動員した。

二月の赤軍の紀念祭に招待されて來たビヨネールの代表、彼女は十二歳である、と云ふのに演壇へ立つて、

——同志諸君！　われ等ビヨネールはすべて準備が出來た、われ〳〵はウダルニクとして毎夜工場へ動員されてゐる、われ〳〵の組はすでに社會主義競爭を宣言した。……わたしはボール紙の箱を一週間前までは一時間に二十であつたのをその後は三十に、一昨日は三十五、昨日は四十まで作つた！　明日は五十に！　一週間後には百作る！　……ビヨネールの生れたモスコー、共産黨の中央部モスコーでは——五ケ年計畫を四ケ年にではなくて三ケ年に——！」

彼女は大人に敗けない宣傳演說をして大喝采を博した。

その年の九月が五ケ年計畫第三年目の決算期である。計畫通りの生產額、生產率を完成しなくてはならないためには、計畫以外の勞力の供給を必要とした。

大學、役所、病院、コーペラチーヴ、劇場、兵營、あらゆる組織はその地域の生產部門に動員されて行く。

槍山の指令されたところはバウマンスキー區の電氣工場である。一九二八年までは荒れはてた儘でうち捨てられてあつたこの老大な工場は、一九年には修繕加工され、モートルが廻轉し、三十年になつては屋上につぎ足し建築までするように擴大發展した。

「午後四時」までに工場の入口へ集れ、と云ふ命令であつたが、四時十五分前まで講義をしてゐて、來て見るとすでに二十分遲れてゐる。從つて知つてゐる學生達や教授の顏は一つも見へ

ない。

工場の受付に理由を話する、ドクマンを提示しただけで許可證を呉れた。しかし二萬人以上もの勞働者の働いてゐる大工場で、何處へ行つていゝか判るものではなかつた。

黨細胞へ行こう！　そう思つて階下にある、細胞委員會を探しあてた。

細胞委員會には赤いトラプカで髪を包んだ若い娘がゐた。

「大學からのウダルンクですか、あたし知つてゐる、教へて上るわ、一緒に行くから少し待つてゐて」

彼女は小聲で男の委員達と會話を交してゐる。

「さあ行きましよう同志！」

と、身輕な彼女はひら〳〵と飛ぶよう先に行つてしまふ。

「あなたは、コンソモールですか？」

と、檜山は階段を上りながら彼女にたづねた。氣輕な彼女は苦笑したがすぐに、

「いや、黨員です」

と、檜山の方を見返つて、

「……一九二八年からの黨員よ、そしてランプ部の部長をしてゐますわ」

檜山は小娘でも鹿馬になつたものでない、工場内では重要な人物である、と考へながら年をたづねると、二十二歳である、そしてまだ獨身であると云つてゐた。

彼女に導かれて、檜山はその組を探し當てた。

その晩學校から來た突擊隊は百名位であつた、彼等は社會的には重要な人物であるが、すでに勞働戰線では現役兵でない、口ばかり達者で手や足は不器用な後備兵である。うす暗い部屋で箱入の電球に黑く「輸出用、最上××型電球何箇入り」さらにその下の空間へ――ソヴェト、聯邦、モスコー、綜合電氣工場――など、と書いたり、「萬國の勞働者團結せよ！」を落書などしてゐる。

中央でしやがんで働いてゐる人々は、電球の包裝の仕直しである、これは輸出統制委員會の檢査によつて返送されて來た品物らしい。

新らしいボール箱を山程擔いで來た學生がある、皆の者の前へ仰々しく荷を下して、

「勘定の出來る人は誰れですか？」

と、眞面目に叫んだので、學生達は皆笑ひ出した。

一階さらに上へ上つた、そこは製作部である、まだ若い娘たちが一心不亂に電球の製作をしてゐる。彼女等の背後には運搬用のレールが敷かれてゐる、恐ろしひ音がしてトロッコーが轟進して行つた。先頭に立つてゐる人はと見ると學校の會計係のイワンである。

「イワン！　お前か！」

檜山に呼ばれたので急造のイワン運轉手は噴き出して逃げるように行つてしまつた。

日本へ來てゐた外交官のゴブルスタインは大きな机の上に座つて電球に紙を卷いてゐる、なれない手つきで一生懸命である。

聲をかけると、彼も苦笑して自分の仕事を眺めてゐる。

「十二時まで働いても定率の半分出來ない」

ゴブルスタインは檜山を食堂へ誘つた、二人は階段を下りたり、廊下を曲つたりして食堂へ出た。茶を飲み、野菜サラダ一皿、二十五カピク、市價よりは三倍も安い價格である。

食堂を出る時に氣をつけると、廊子には工場の壁新聞で一杯である。

ウオツカに餓の頭をぶら下げた妙な男の側には——黨員で酒を呑む××××と書いて大きく

「——打倒酒喰い、五ケ年計畫を防害する奴——」

と、禁酒運動の宣傳文がある。

その下には「煙草をやめよ」一建築勞働者より、と投書をその儘張りつけてある。

檜山は自分の職場へ戻つた。女工達の製造したランプを計算して箱へ入れる仕事である。

歩きながら横の方を見ると、ペラは包裝の仕方が完全でないと例の小娘の部長さんから注意されてやり直しをしてゐる。彼女は大學では黨細胞の書記で秀れた黨員であるが、こゝでは未熟練女工としての規律で働かなくてはならない。

「ペラ！　お前女工上りのくせに何の事だ！」

いつになく水兵服を着て子供らしく後向いてゐた彼女を呼ぶと、彼女は少し頰を赤めた。

「だつて、あたし紡績の女工だわ！　こんな紙で包むような仕事は初めてよ！　お前もやつて御覽！」